

神戸市灘区

# 篠原A遺跡

財團法人 古代學協會

昭和59年

## 例　　言

1. 本書は、昭和 58 年に(財)古代學協會が今西建設株式会社の委託を受けて実施した神戸市灘区篠原中町 5 丁目 28・29 番地に所在する篠原 A 遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆は、下條信行、定森秀夫、南博史、緒方泉、原真一、岩元雅毅が分担した。なお、放射性炭素年代の測定・執筆は京都産業大学理学部山田治教授、小橋川明氏に御願いした。  
分担は下記のとおりである。
  - 下條…… I - 1
  - 定森…… I - 3, III - 1, IV - 1・2 - 1), V, VI, VII
  - 南…… III - 2 - 1), VII の一部
  - 緒方…… II
  - 原…… III - 2 - 2), IV - 2 - 2)
  - 岩元…… I - 2
  - 山田治教授、小橋川明氏…… VII
3. 遺構の実測は緒方、岩元、柴田悟、川西弘一、下條、定森が、遺物の実測は主に藤友陽子、船戸裕子、飯田美佐子、原、柴田、岩元が行い、製図は藤友、原、森はる美が行った。遺構・遺物の撮影は定森が行った。
4. 本書では第 1・2 図は真北、その他は磁北を使用した。図版の遺物番号は挿図の番号と一致する。
5. 編集は下條の指導のもとに定森が行った。

## 目 次

	頁
I. はじめに .....	1
1. 調査に至る経過と調査組織.....	1
2. 調査経過.....	1
3. 立地と環境.....	2
II. 層位 .....	4
III. 縄文時代中期・後期の遺構と遺物 .....	9
1. 遺構.....	9
2. 遺物 .....	11
IV. 縄文時代晩期の遺構と遺物 .....	21
1. 遺構 .....	21
2. 遺物 .....	22
V. 弥生時代後期の遺構と遺物 .....	29
1. 遺構 .....	29
2. 遺物 .....	32
VI. その他の遺構と遺物 .....	36
1. 遺構 .....	36
2. 遺物 .....	37
VII. 放射性炭素年代測定 .....	38
1. はしがき .....	38
2. 測定方法について .....	38
3. 測定結果 .....	39
4. 測定結果の考察 .....	40
VIII. まとめ .....	40

## 図版目次

図版第1 遺跡遺景・層位	図版第8 遺物出土状況
図版第2 調査終了状況	図版第9 繩文時代中期末土器
図版第3 繩文時代中期・後期遺構(1)	図版第10 繩文時代後期前葉土器
図版第4 繩文時代中期・後期遺構(2)	図版第11 繩文時代中期・後期石器、石製品
図版第5 繩文時代晚期遺構	図版第12 繩文時代晚期遺物(1)
図版第6 弥生時代後期遺構(1)	図版第13 繩文時代晚期遺物(2)
図版第7 弥生時代後期遺構(2)・その他の遺構	図版第14 弥生時代後期遺物・その他の遺物

## 挿図目次

	頁
第1図 調査区域とグリッド配置図	2
第2図 褐原A遺跡周辺地形図	3
第3図 褐原A遺跡周辺主要遺跡分布図	4
第4図 基本層序模式図	5
第5図 調査区南壁土層断面図	6, 7
第6図 第3トレンチ西壁土層断面図	8
第7図 繩文時代中期・後期遺構図	9
第8図 住居址実測図	10
第9図 土壌実測図	10
第10図 住居址出土土器拓影実測図	12
第11図 土壌1, 4出土 土器拓影実測図	14
第12図 土壌3, 5, 6出土 土器拓影実測図	15
第13図 包含層出土土器拓影実測図	16, 17
第14図 繩文時代中期・ 後期石器実測図(1)	18
第15図 繩文時代中期・ 後期石器実測図(2)	20
第16図 繩文時代中期・ 後期石製品実測図	21
第17図 繩文時代晚期遺構図	22
第18図 暗灰白色砂質土層・黄褐色砂質土 層出土土器拓影実測図	23
第19図 灰色砂質土層出土土器 拓影実測図(1)	24
第20図 灰色砂質土層出土土器 拓影実測図(2)	25
第21図 灰黄色砂質土層出土 土器拓影実測図	26
第22図 自然河道出土土器拓影実測図	27
第23図 繩文時代晚期石器 , 石製品実測図	28
第24図 弥生時代後期遺構図	29
第25図 溝実測図	30
第26図 溝層位断面図(調査区東壁)	31
第27図 住居址状遺構実測図	31
第28図 溝内出土土器実測図(1)	32
第29図 溝内出土土器実測図(2)	33
第30図 包含層出土土器実測図	34
第31図 有文土器片拓影実測図	35
第32図 住居址状遺構出土土器実測図	36
第33図 弥生時代後期石器実測図	36
第34図 柱穴列実測図	37
第35図 柱穴列付近出土須恵器実測図	37
第36図 有舌尖頭器実測図	37
第37図 弥生土器実測図	37

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経過と調査組織

篠原遺跡は、昭和4年、小林行雄博士によって世に紹介され、皆の知るところとなっていた遺跡である。<sup>1)</sup> 博士の紹介された地点は本遺跡北方の広い範囲であるが、今回の調査地は道路1本南によった約15m隔たった地点である。

こうした背景のもと、神戸市教育委員会は当地のマンション建設に先立ち、事前調査を行い、その上部に土師器・弥生土器を出す2層の包含層が存在することを確認し、事前発掘を要することを、施行主である今西建設株式会社に報じた。これを受け、同社および施工業者であるフジタ工業より、昭和58年4月当博物館に調査依頼があり、平安博物館調査部では本遺跡の発掘を引き受けることになった。調査に先立ち、包含層の下底部が未確認であったため、神戸市教育委員会の立ち会いのもと、昭和58年5月7日に再度試掘を行い、下部に縄文時代の包含層があることを確認し、5月25日から9月10日まで現地調査を行った。

調査は平安博物館調査部定森秀夫を主任とし、下條信行が統括し、緒方泉(同志社大学大学院)、川西弘一、柴田悟(以上花園大学)、岩元雅毅(立命館大学)が調査補助員として参加し行われた。

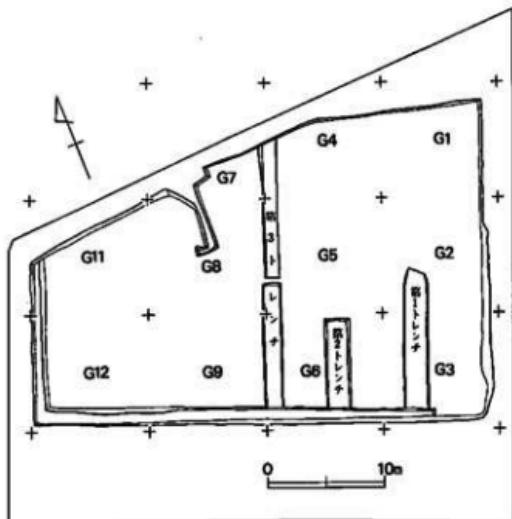
なお、調査に当っては神戸市教育委員会文化財課奥田哲通係長をはじめ文化財課の諸氏、兵庫県教育委員会松下勝、山本三郎氏に援助を受けたほか、今西建設の岩崎快裕室長、フジタ工業岩田整所長には直接多くのお世話を頂いた。

### 2. 調査経過(第1回)

昭和58年5月25日に器材搬入を行い、翌26日、10m四方のグリッドを設定し、東側地区(G1～9)より重機による建物基礎の排除と重機・手掘りによる第1～4層までの掘り下げを行っていった。

5月30日よりは第5層の暗紫色砂質土層(弥生後期)を約8～10cmずつ平面的に掘り下げる作業を開始した。6月3日にはG2で柱穴列(平安後期?)を検出、さらに点在した土器窓や土質差などから第5層の落ち込みを見つけ、確認のため断ち割り数本を入れた結果、G2を中心とする溝を確認した。溝および他のグリッドの第5層を完掘したのは7月4日で、翌日から実測・撮影を行った。

7月7日からは第6層の灰黄色砂質土層(縄文晩期)を第5層同様約8～10cmずつ平面的に掘り下げ始めた。第6層は比較的薄く、2回の掘り下げで終った。調査区の地勢条件により各層が傾斜しているため、第7層の灰色砂質土層(縄文晩期)が露出している部分では第6層と併行して作業を進めた。第6層と同様、この層も薄いところがあり、グリッドによってはこの層の確認できないところもあった。7月14日より第8層である遺物の少ない黄褐色砂質土層(縄文晩



第1図 調査区域とグリッド配置図

層の確認を行った。東側地区の最終面の実測・撮影・埋戻しと、西側地区(主にG 8・11・12)の建物基礎抜きを含めた作業は8月9日に終えた。

8月10日より西側地区的作業を開始し、第5層では住居址状の造構を検出した。この作業と併行して自然河道3の砂礫層を掘り始めた。この河道には下部に疊、巨疊がかなりあり、8月19日までかかって掘り上げた。この河道の北側では第6～8層は比較的薄く、8月10日から同12日までに掘り上げることができた。8月20日から第10層を掘り下げ始め、土壤などを検出して、9月6日までに掘り終えた。9月8日に西側地区的実測・撮影等を終え調査作業を終了した。器材撤去は9月12日であった。

本調査は、梅雨・台風の季節にもかかわらず、天候に恵まれ予定通りに作業が進められた事は幸いであった。

### 3. 立地と環境(第2・3図、図版第1上)

篠原A遺跡は神戸市灘区篠原中町5丁目28・29番地に所在する。東側に六甲川、西側に仙谷川が流れ、それらが本遺跡の南側で合流して都賀川となる。本遺跡はこの両川に挟まれた剣先状の北から南へと急傾斜する地形に立地する。本遺跡の現地表面は標高約61m弱で、現海岸線までの直線距離は約1.6kmである。

前述したように、篠原遺跡は戦前、小林行雄博士によって報告されていた周知の遺跡であった。小林博士が遺物を採集された地点は本遺跡より北側に分布している。今回の調査は、この篠原遺跡の最初の発掘調査に当るが、本遺跡の東、六甲川を渡った篠原中町2丁目に所在する

期)とG 3を中心とする自然河道1を掘り始めた。第8層は南側ではかなり厚く、北側では7月22日に掘り上げることができた。

引き続き北部では第10層(縄文中・後期)の茶灰色砂質土層を掘り下げる一方、弥生後期溝のかぶり土を排除する作業を行った。第10層では7月28日にG 5で住居址を検出し、他にも疊がつまた土壤等も検出した。そして、この東側地区では最終的にマンションの主柱が入る部分について3本のトレンチを入れ、土

B遺跡(標高約56m)の発掘調査も神戸大学工学部多測敏樹教授によって行われた。

周辺の主要遺跡を概観すると、縄文時代の遺跡は少なく、本遺跡から晩期の壇場、伯母野山遺跡群から少量の遺物、桜ヶ丘(甲新田)遺跡では前期の遺物が出土している位であった。今回の本遺跡調査では、中期末～後期前葉、晩期中・後葉の遺構・遺物が検出され、またB遺跡では遮光器土偶をはじめとした晩期の土器が出土している。

弥生時代では、本遺跡から後期の土器が出土することは知られていたし、B遺跡からも後期の土器が出土しているようである。また、阪急六甲駅南側の八幡神社境内でも弥生土器が出土していると聞く。本遺跡の真北、比高差にして約140mほど上に中期～後期の高

地性集落である伯母野山遺跡群<sup>1)</sup>(牛小倉山、勝岡山、伯母野山遺跡)が存在する。また、その東方に所在する桜ヶ丘B遺跡、赤堀山遺跡、荒神山遺跡<sup>2)</sup>も中期～後期にかけての高地性集落である。一方桜ヶ丘遺跡<sup>3)</sup>から銅鐸14口、銅戈7口が出土したことは有名で、渦ヶ森遺跡からも銅鐸が出土している。その他に、本遺跡より標高の低い位置にある遺跡としては、後期から古墳時代初めにかけての郡家大蔵遺跡と御影中町遺跡がある。

古墳時代では、前期古墳として、全長69mの前方後方墳である処女塚古墳が知られている。中期古墳では、甲冑・鉄鎌等の武具や玉類などが出土した一王山古墳があるが、これは消滅してしまっている。後期古墳では鴨子ケ原古墳群があるが、これも消滅している。また、伊賀塚も消滅し詳細不明で、大正年間に紹介された鬼塚古墳も今となっては詳細不明である。この他、御影中町遺跡では勾玉模造品等が出土していて、祭祀遺跡とみられている。

奈良時代では、郡家大蔵遺跡で掘立柱建物が検出され、都衙的性格をもつものとされている。平安時代では、滝ノ奥遺跡で経塚・火葬墓等が検出されている。経塚からは和鏡11面等が出土していて、12世紀前半頃とされている<sup>4)</sup>。

特に、今回の本遺跡調査では縄文中～晩期の遺構・遺物が検出され、本遺跡周辺における縄文時代の空白を埋めるものと言えよう。



第2図 篠原A遺跡周辺地形図(縮尺: 1/10,000, ●印は小林行雄博士採集地点)



第3図 篠原A遺跡周辺主要遺跡分布図(縮尺: 1/25,000) 1. 篠原A遺跡, 2. 篠原B遺跡, 3. 牛小舎山遺跡, 4. 勝岡山遺跡, 5. 伯母野山遺跡, 6. 桜ヶ丘B遺跡, 7. 桜ヶ丘遺跡, 8. 桜ヶ丘(甲新田)遺跡, 9. 渕ヶ森遺跡, 10. 赤塚山遺跡, 11. 荒神山遺跡, 12. 郡家大蔵遺跡, 13. 遠女塚古墳, 14. 一王山古墳, 15. 鴨子ヶ原古墳群, 16. 伊賀塚古墳, 17. 御影中町遺跡, 18. 滝ノ奥遺跡

## II. 層位

篠原A遺跡の層序は基本的に、第1層=暗灰色砂質土層、第2層=明黄色砂質土層、第3層=明灰色砂質土層、第4層=暗黄褐色砂質土層、第5層=暗紫色砂質土層、第6層=灰黄色砂質土層、第7層=灰色砂質土層、第8層=黄褐色砂質土層、第9層=暗灰白色砂質土層、第10層=茶灰色砂質土層の10層からなる(第4図)。さらに、茶灰色砂質土層下にも深掘りにより疊層、暗茶灰色砂質土層、疊層、明茶色砂層、明茶色粘質土層と続くのを確認したが、すべて無遺物層であった。全体的に、各層とも西北から南東に傾斜する傾向をみせている。

次に、調査区南壁および第3トレチ西壁断面を通して各層の特徴と断面中にみられる自然河道について簡述しよう。

調査区南壁断面(第5図)は発掘調査前に建っていた住宅の基礎により、上部とG3・6・9で各1ヶ所、G12で2ヶ所攪乱を受けている。

暗灰色砂質土層は上部が攪乱で10~25cmほどなくなっているが、表土下25~65cmにみられ、1mm程度の砂粒を含み、西へ行くにしたがい厚さを減じ、G12では多少色調が異なる。

明黄色砂質土層は上層より黄味が強いが、東へ行くにしたがい上層と区別し難くなる。表土下32~77cmにみられるが、G12では薄くなる。

明灰色砂質土層は砂粒がやや粗く、表土下40~105cmにみられ、西へ行くにしたがい厚さを増すが、G12では薄くなる。

暗黄褐色砂質土層は1~10mm程度の砂粒を含み、表土下60~105cmでみられ、西へ行くにしたがい厚さを増すが、G12では薄くなる。以上の4層は旧耕土と思われる。

暗紫色砂質土層は弥生後期の包含層である。やや粘性が強く、色調から他層とは明瞭に区別できる。表土下70~140cmにみられ、西に行くにしたがい堆積が薄くなり、G12西端では消えていくようである。

灰黄色砂質土層・灰色砂質土層は共に縄文晩期包含層であり、やや砂質が強くて、1~5mmほどの砂粒を含む。灰黄色砂質土層の方がやや明るい。表土下100~190cmでみられる。

黄褐色砂質土層も縄文晩期包含層で、極めて砂質が強く、1~3mm程度の砂粒を含む。表土下125~250cmでみられる。

暗灰白色砂質土層は縄文晩期滋賀里III式土器出土層で、G12にみられる自然河道4の下、表土下200~300cmでみられ、東から西へ傾斜している。

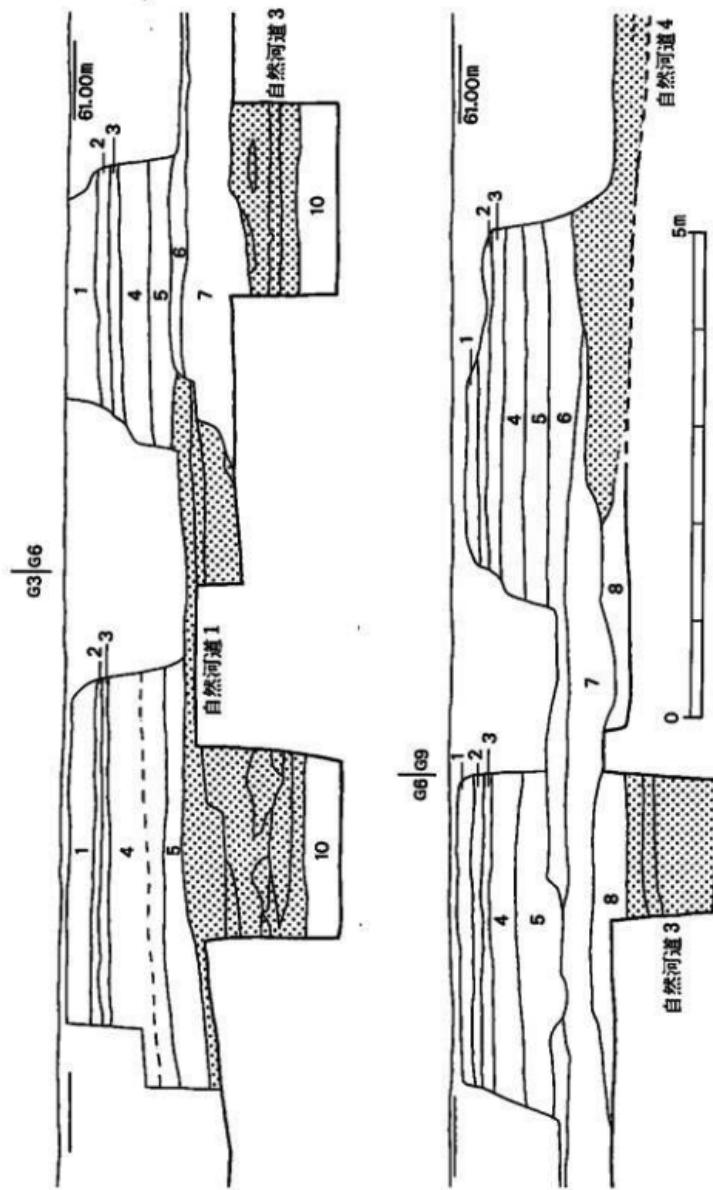
茶灰色砂質土層は縄文中・後期包含層であり、表土下220~300cmで見られ、西に行くにしたがい傾斜を強める。この層の上部はやや灰色味が強く、上層を灰茶色砂質土層、下層を茶灰色砂質土層として分層できる部分もあるが、全体としては下に行くにしたがい漸移的に茶色味が強くなっていく。鉄分を斑点状に含んでいる。茶灰色砂質土層は、調査区南壁ではG9・12、G3第1トレチ、G6第2トレチに認めることができる。

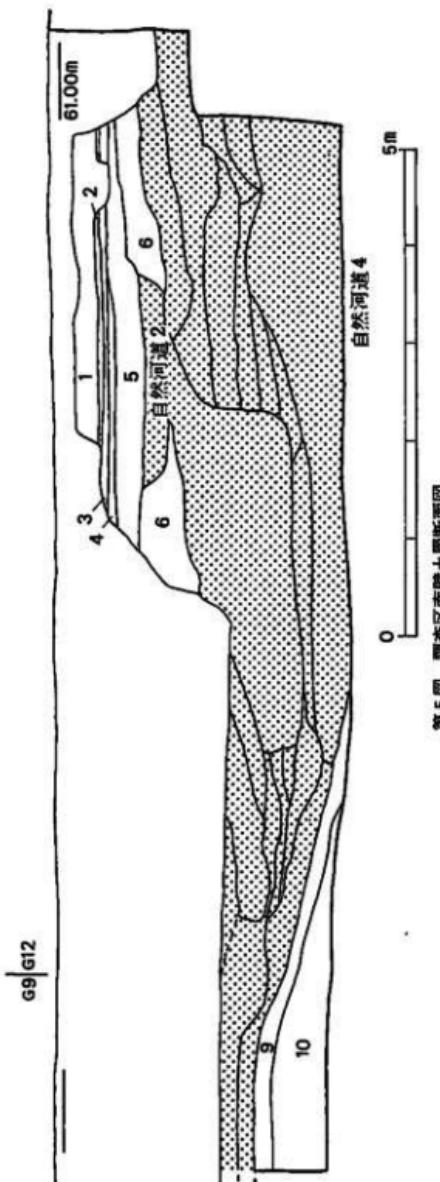
また、南壁断面中には4ヶ所で自然河道(第17図参照)が認められる。

自然河道1はG2・3・6を北東から南西に向かって流れ、暗紫色砂質土層(弥生後期包含層)の下になる。

第1層	暗灰色砂質土層	
第2層	明黄色砂質土層	
第3層	明灰色砂質土層	
第4層	暗黄褐色砂質土層	
第5層	暗紫色砂質土層	弥生後期包含層
第6層	灰黄色砂質土層	縄文晩期包含層
第7層	灰色砂質土層	◆
第8層	黄褐色砂質土層	◆
第9層	暗灰白色砂質土層	◆
第10層	灰茶色砂質土層	縄文中・後期包含層
	茶灰色砂質土層	

第4図 基本層序模式図





- 第5図 調査区南壁土層断面図
1. 暗灰色砂質土層
  2. 明黄色砂質土層
  3. 明灰色砂質土層
  4. 暗黄褐色砂質土層
  5. 暗紫色砂質土層
  6. 反灰色砂質土層
  7. 灰褐色砂質土層
  8. 黄褐色砂質土層
  9. 暗灰色砂質土層
  10. 茶灰褐色砂質土層

自然河道2はG12を北西から南東に向け流れ、縄文晚期(後葉)包含層を切っている。

自然河道3はG6・9・11を北西から南東に向け流れ、縄文中・後期、晚期(中葉)包含層を切っている。

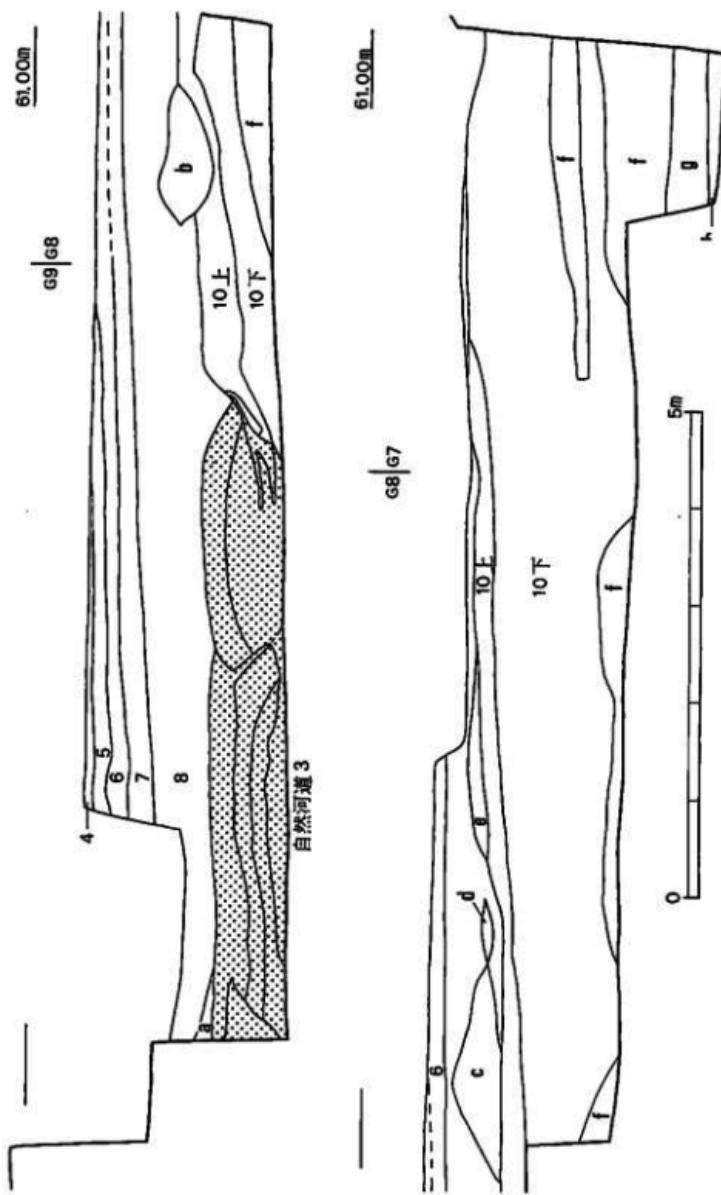
自然河道4はG12を北西から南東に向け流れ、自然河道2より下にみられ、縄文晚期(中葉)包含層を切っている。

第3トレーニング西壁断面(第6図)は北から南への傾斜が堆積状況にも反映している。層序は基本的に調査区南壁断面と同じであり、断面中南側に自然河道3の断面がみられる。

以上、層序について簡述してきたが、最後に小林行雄博士の櫛原遺跡調査時(本遺跡北側)の土層観察との対応関係をみておきたい。

小林博士はA層(暗灰色)、B層(黄褐色、祝部土器・弥生土器包含)、C層(黒灰色、弥生土器包含層)、D層(やや粘性強い茶色)、E層(褐色、無遺物層)の5層に分けられている。

A層は暗灰色砂質土層・明黄色砂質土層・明灰色砂質土層と、B層は暗黄褐色砂質土層と、C層は暗紫色砂質土層と対応するだろう。D・E層の対応は難しいが、D層が灰黄色砂質土層と、E層が茶灰色砂質土層と対応する可能性もあり、また色調から言えばD層が茶灰色砂質土層に対応する可能性もある。



第6図 第3トレンチ西壁土層断面図  
1~9までは第5図に同じ。10上、灰茶色砂質土層、10下、茶灰色砂質土層、a、黃灰色砂層、  
b、黃色砂層、c、赤褐色砂層、d、黃灰褐色砂層、e、赤褐色砂層、f、壤層、g、明茶色砂層、h、明茶色粘質土層

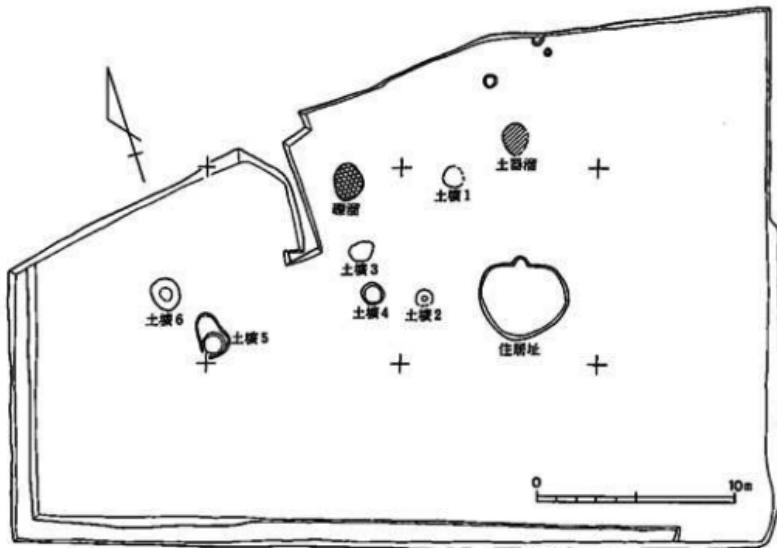
### III. 繩文時代中期・後期の遺構と遺物

#### 1. 遺構(第7～9図、図版第3・4)

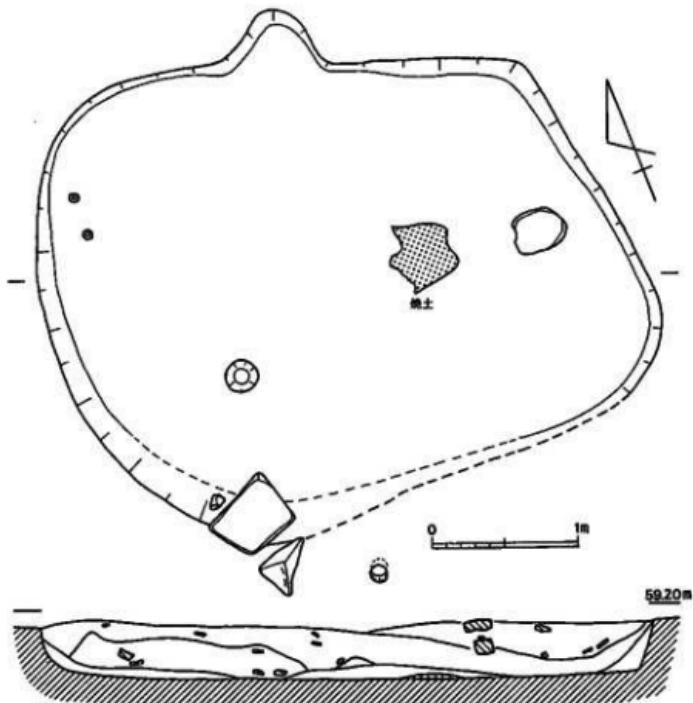
包含層は厚いところで1m以上ある。調査区南側で急に落ち込んでいる関係で、遺構は調査区北側でのみ検出された。確認できたのは、住居址1、土壙9(うち3つは無遺物)、土器窯1、礫窯1であった。住居址、土壙1・2・4は中期末に、土壙3・5・6は後期前葉に属する。

住居址(第8図)は東西約4.2m、南北約3.3mの方形に近い不整円形を呈し、北に半円状につき出た部分がある。掘方ラインが明瞭に出す、特に南の方はラインが極めて不明瞭であった。内部には、柱穴かと思われる大小のビットが3個あり、東側には扁平な石と焼土を確認した。また、南壁にかかる扁平な石があり、住居址南側で北側に向かって斜に掘り込んだ小ビットを確認した。ここからは土器多数の他、石鏃30本などが出土している。

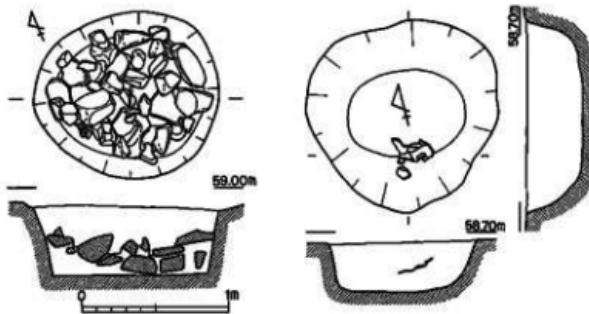
土壙4(第9図左)は直径1.15～1.3mのほぼ円形を呈し、深さは50cmほどである。下方には大小40個ほどの花崗岩礫がつまっていた。これらの中には焼けたものがかなりあったが、炭はほとんどみられず、土器の出土量も少なかった。土壙5(第9図右、下段のみの実測図)は上下2段になるよう、下段は直径約1.3mのほぼ円形を呈する。炭が大量に混っていて、土器の出土量も多いが、内部が焼けたような痕跡は確認できなかった。



第7図 繩文時代中期・後期遺構図



第8図 住居址実測図



第9図 土壌実測図(左:土壤4, 右:土壤5)

## sondage (図版第3下)

は、直径約1.5～2 mの円形状の範囲に大小の花崗岩礫（一部に焼けたものがある）が集中し、その周囲にまた礫が散在する。自然の溜と解するより、意図的なものを窺わせる。なお、この検出面で、磨製石斧（第14図2）が出土した。

## 2. 遺物

### 1) 土器(第10~13図、図版第9・10)

今回出土した縄文時代中期・後期の土器は、コンテナ約15箱にのぼり、その大半が茶灰色砂質土層および住居址、土壤より出土した。これらの土器は、大きく中期末(第1群)と後期前葉(第2群)との2つに分けることができる。それぞれはさらに器形・文様等によって細分が可能であるが、ここではそれらの特徴的な例をとりあげて記することに留める。以下、住居址、土壤、包含層出土の順に記していく。

#### a. 住居址出土土器(第10図)

住居址は、前記したようにG5に位置しており、その埋土より第1群を中心とする土器片が、コンテナ約2箱ほど出土した。ただし、遺構の遺存状態が不良であったため、この時期を確定する資料を限定することはできなかった。おそらく、中期末に位置するものではある。

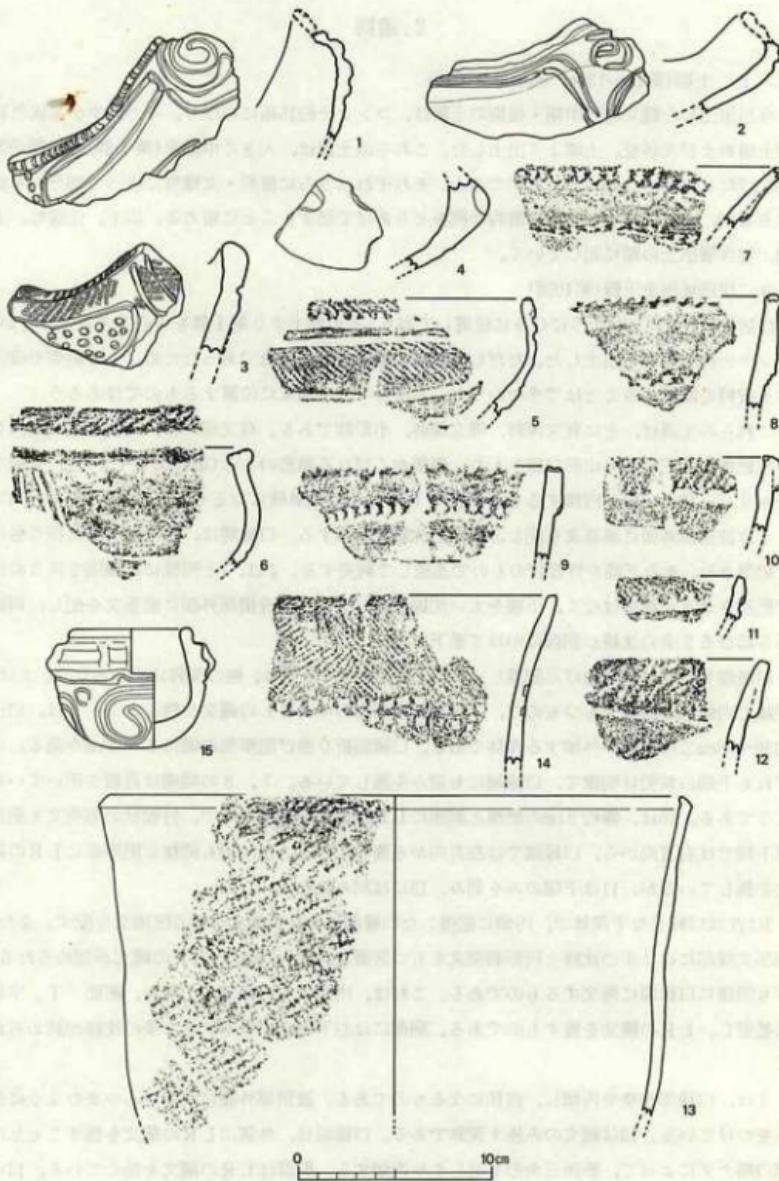
これらの土器は、主に有文深鉢、繩文深鉢、小形鉢である。有文深鉢は、「く」字状に内湾ないし肥厚する把手状の山形口縁をもち、頸部がくびれる器形のもの(第10図1~4)と、平縁でキャリバー状に口縁が内傾するもの(同5, 6), やや外傾気味になるものとがある(同7~14)。

1は波頂部外面に渦巻文を配し、両側を沈線で区画する。口縁端は、粘土を外側に折り曲げて肥厚させ、その下端を竹管状のもので連続して刺突する。2は、1と同様に口縁端を折り曲げて肥厚させるが刺突ではなく、下端を太い沈線が廻っている。波頂部外面に渦巻文を配し、両側から延びる2条の沈線が胴部にかけて垂下する。

口縁端を外側に折り曲げて肥厚し、その下端を刺突する例は、他の深鉢にもみられる。5は、平縁で内傾する口縁をもつもので、口縁端と区画文の中にLRの繩文が残る。7~9は、口径約30~38cmで口縁部が外傾する深鉢である。口縁部折り曲げ肥厚部の幅は3~5cmを測る。いずれも下端の刺突は明瞭で、口縁端にも刻みを施している。7, 8の刺突は貝殻を用いているようである。10は、幅約2cmの肥厚と胴部にLRの繩文を施すもので、竹管状の刺突文を肥厚部下端では右方向から、口縁端では左方向から施している。11, 12も同様に肥厚部にLRの繩文を施しているが、11は下端のみを刻み、12には刻みはない。

3は波状口縁をなす深鉢で、内側に拡張した口縁部にLRの繩文が残る区画文を配す。また、胴部文様部には2条の沈線と円形刺突文をもつ区画文、また一部にはLRの繩文が認められる。6も同様に口縁端に施文するものである。これは、内傾する口縁部の上端を、断面「T」字状に拡張し、LRの繩文を施すものである。胴部には右下方向に垂下する2条の沈線が認められる。

4は、口縁部がやや内傾し、波状になるものである。波頂部外面に両側からつまむように凹みをついている。13は繩文のみ施す深鉢である。口縁端は、外側にLRの繩文を施すことと内側の横ナデによって、断面三角形を呈しやや内傾する。胴部はLRの繩文を施している。14は



第10図 住居址出土土器拓影実測図

口径約22cmを測る深鉢である。縄文はLRを縦位に施しているが、部分的に方向を替えて羽状になっている所もある。そして、口縁下約4~6cmのところに2列の刺突列が廻る。刺突は右方向から施されているが、かなり角ばったものを用いているようである。15は小形の鉢である。口縁下に廻る2条の凸帯とそれに交差する横状把手状の凸帯とを組み合わせている。胸部には横位の沈線と、2条1組で丁字状の沈線文がある。

#### b. 土壙1・4出土土器(第11図)

土壙1・4からは、住居址と同様に第1群の土器が出土している。第11図1は、土壙1から出土したもので、平縁で内傾する口縁をもつ有文深鉢である。2・3は、この胸部・底部と思われる。口縁部には、3条1組の太い沈線で文様を描く。口縁部と胸部の境界には同様の太い沈線が廻っている。また、部分的に縄文が残るが、風化が著しく詳細は不明である。LRの縄文を縦位・横位に用いているようである。

4・5は土壙4から出土したものである。4は3と同様に、平縁で口縁内傾する深鉢である。口縁端より縦位に突起をはりつけ、その両側を太い沈線で四角く区画する。区画内と口縁上端にはLRの縄文が認められる。5は口縁がやや外傾する深鉢である。口縁と胸部の境に指頭圧痕をもつ凸帯が廻る。胸部には沈線が認められる。7は横状把手をもつ深鉢である。頸部がややくびれる形になると思われ、胸部と頸部をつなぐように横状把手がつく。また、胸部には縦位の沈線で文様が描かれているものと思われる。

#### c. 土壙3・5・6出土土器(第12図)

土壙3・5・6からは、後期前葉を主体とする第2群の土器が出土した。

第12図1は、くびれた頸部から外反、やや波状口縁になる深鉢である。肥厚させた口縁文様帶に、区画文と波頂外面に沈線が施されている。また、口縁上端と下端にはLRの縄文が残る。2~4は平縁で口縁がやや外傾する深鉢である。いずれも1に比べ、口縁肥厚部の幅が狭い。2は、1と同様に区画文と沈線で口縁を飾り、LRの縄文が残る。そして、頸部には条痕が顕著に認められる。3・4の口縁部には断続的な沈線が廻っている。

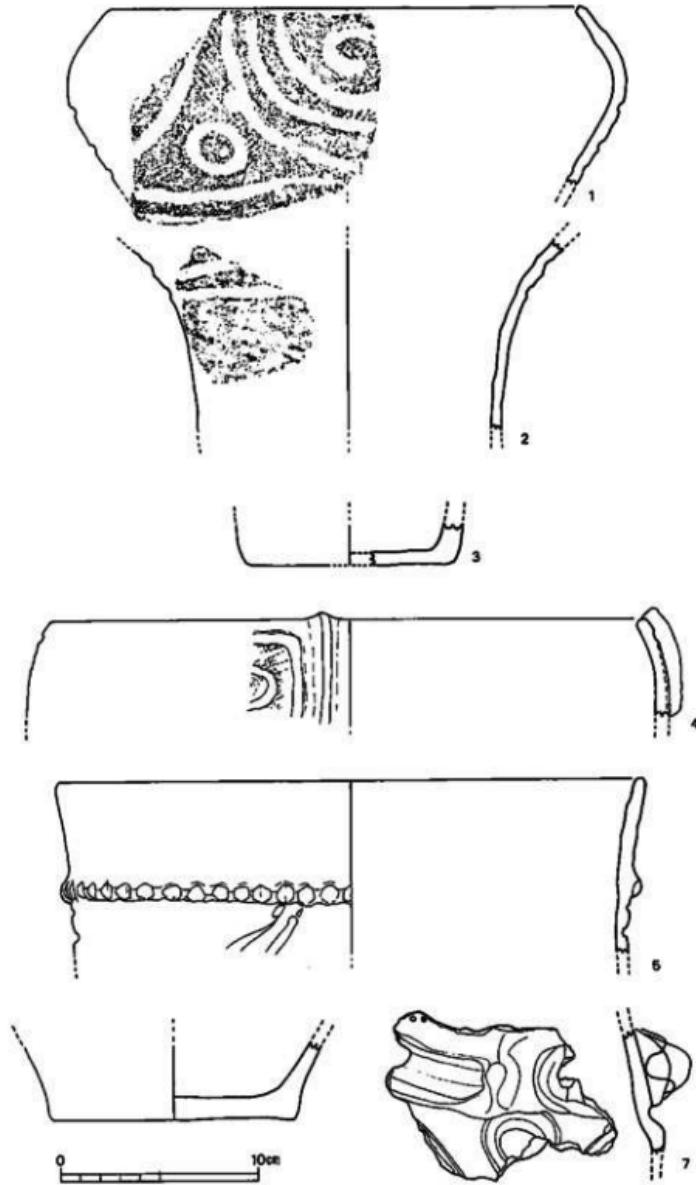
5はやや外傾する口縁をもつ深鉢で、口縁端には粘土紐をねじった突起がつく。そして、胸部にかけて刻みのある凸帯を縦にはりつけている。6はバケツ状の形態をもつ深鉢である。堀ノ内I式の新しい段階のものであろう。7は口縁内側に凸帯をもつ例であるが、細片のため詳細は不明である。8・9は渦巻文をもつ、口縁文様部および胸部の破片である。8は第1群のものであろう。

10・11は無文の深鉢である。11は胸部が大きく張り、口縁はわずかに外傾する。10は表裏面ともナデ調整。11は条痕が残る。

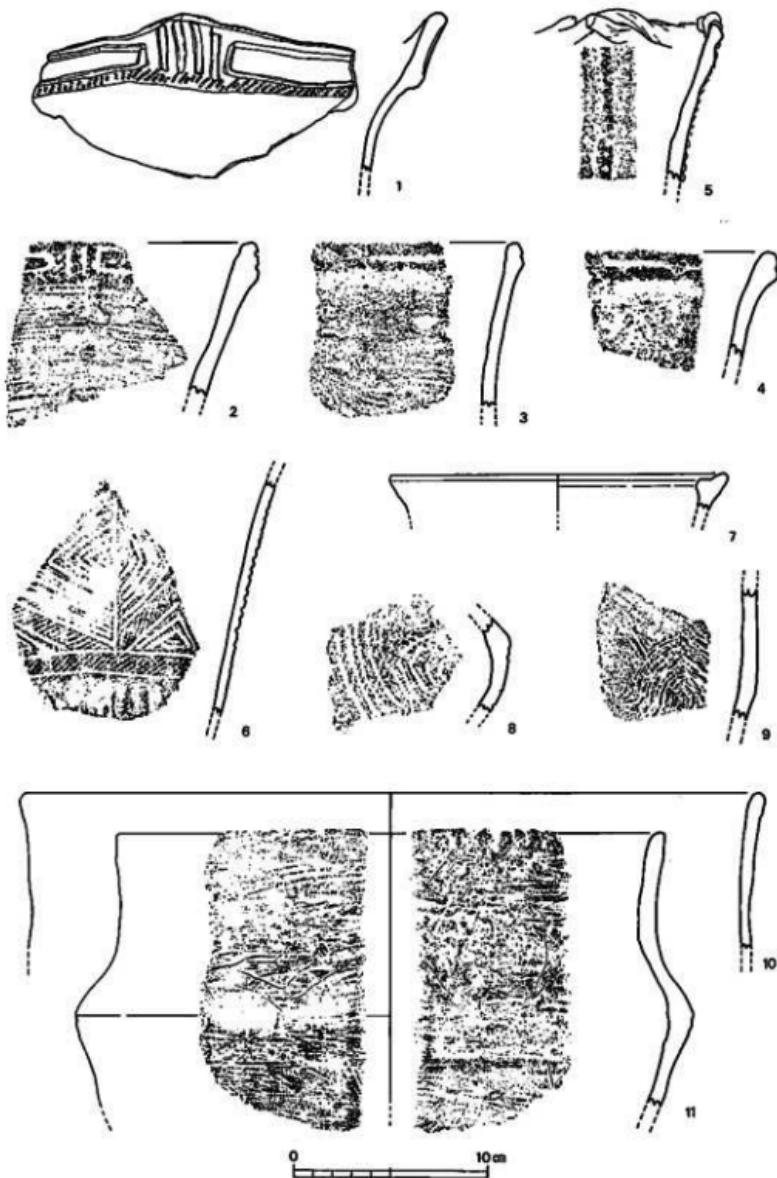
#### d. 包含層出土土器(第13図)

包含層(茶灰色砂質土層)からは、第1群と第2群の土器が出土した。また、晩期の土器片も数点みられる。

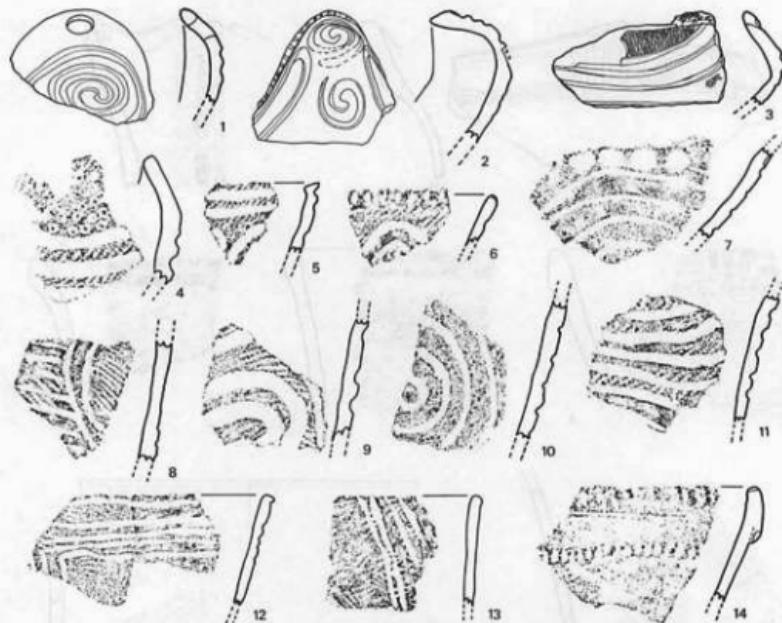
第13図1・2は、「く」字状に内湾する山形口縁をもち、頸部がくびれる深鉢である。住居址



第11図 土壙1・4出土土器拓影実測図



第12図 土壌3・5・6出土土器拓影実測図



第13図 包含層出土土器拓影実測図

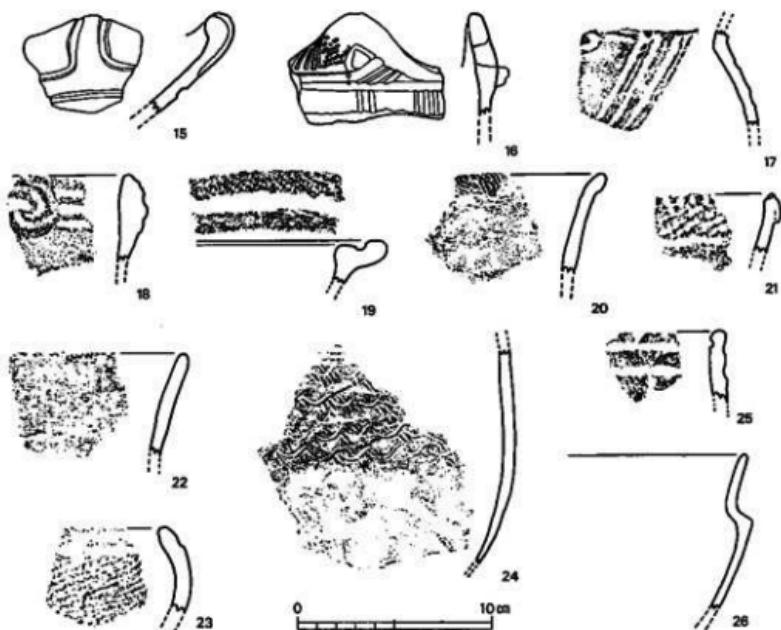
出土の例(第10図1・2)と同様に、波頂部に渦巻文を配している。とくに2は、口縁端を折り曲げて肥厚させ、その下端を刺突するタイプのものである。3は、平縁で内傾する口縁をもつ深鉢で、住居址出土の例(第10図5)と同様のものである。口縁部は3条の沈線とLRの縄文を施す。4は、区画の中に竹管状の円形刺突をもつもので、内傾する山形口縁をもつ深鉢である。5・6はやや外傾する平縁口縁の深鉢で、胴部に渦巻状の沈線文がのこる。5には口縁に平行して2条の沈線、6は口縁端に逆D字状の刻みが残る。7～11は、渦巻文をもつ胴部破片である。とくに、7は指頭圧痕がみられる。7、8、9、11には縄文が残る。

12、13は二枚貝を用いた疑似縄文をもつものである。口縁はどちらもやや外傾する。12が口縁に平行する沈線を、ほぼ真下に垂下させているのに対して、13は口縁端部から右下に垂下させている。14は住居址の例(第10図5)と同様である。

15は、ゆるやかな波状口縁と沈線文をもつ深鉢で、中津式に相当する。16は口縁端に、沈線と縄文で飾る突起をもつ深鉢である。18は肥厚させた口縁部に渦巻と沈線文を施している。19は、断面「T」字状に拡張した口縁端部に、沈線とLRの縄文を施す。福田KII式に相当する。

20、21は口縁部を折り曲げて肥厚させ、それぞれRL、LRの縄文を施している。

24は、有文深鉢の胴部で、結節したRLの縄文を用いて横位に施している。一乗寺K式であろう。25は、ほぼまっすぐに立ち上がる口縁に太い沈線を廻らすもので、口縁内側にも沈線が



みられる。元住吉山II式のものであろう。26は晩期の浅鉢である。

## 2) 石器・石製品(第14~16図、図版第11)

### a. 石器組成と出土状態

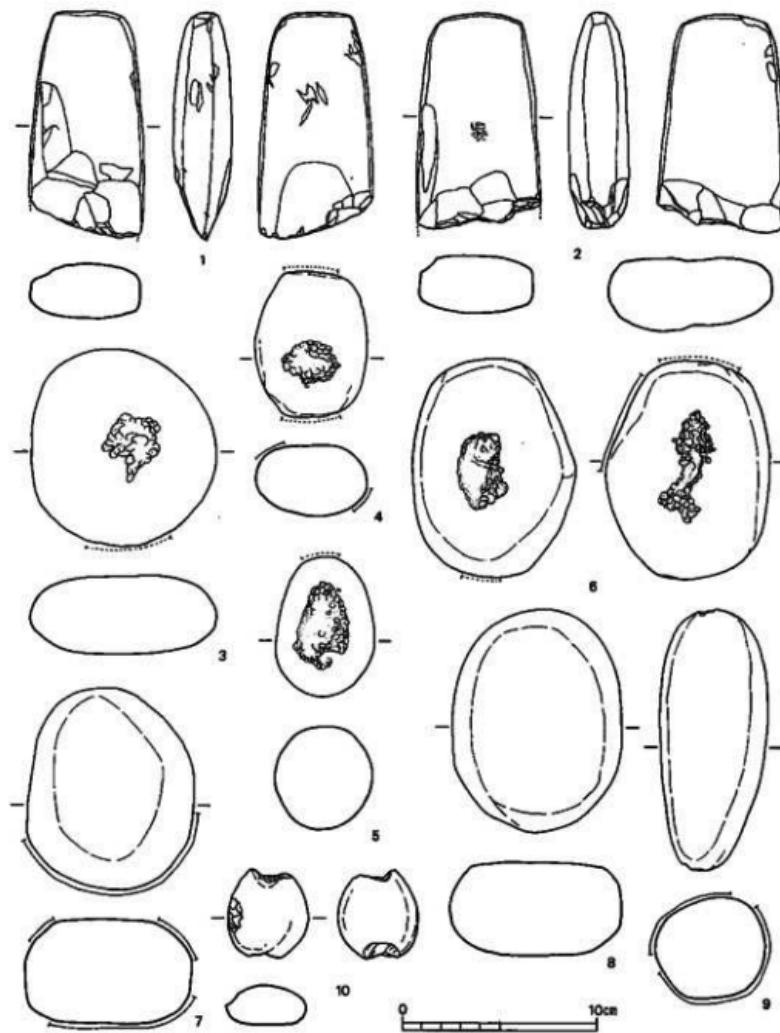
本遺跡において、縄文時代中期・後期に属すると思われる石器・石製品は、茶灰色を呈する包含層出土のもの、およびG 5の住居址内埋土、土壤2・3・4・5の埋土出土のもの等である。

製品の総数は、破片も1点とすると、298点にのぼり、その内訳は、磨製石斧3点、敲石6点、磨石6点、礫石2点、石鏃259点、削器11点、石錐5点、楔形石器4点、石棒および用途不明の石製品各1点となっている。この他に、磨耗のある平坦面を有する大形の花崗岩や砂岩の礫が6点認められる。

石器に使用されている石材は、打製石器については、チャート製1例を除いて、他は全てサヌカイトであり、磨製石器等には、花崗岩系の岩石を中心として、多様な石材が認められる。

出土状態は、平面的には、G 8・9・11・12およびG 5の住居址に集中する傾向をみせるが、生活面を示すような面的な分布は認められなかった。また、器種ごとの分布にも偏りは認められなかった。

### b. 磨製石斧(第14図1・2)



第14図 繩文時代中期・後期石器実測図(1)

3点とも凝灰岩製で、1点は破片であり、他の2点はとともに定角式に分類され、刃部を欠損しているが、両刃であろうと思われる。

#### c. 敲石(第14図3～6)

円錐の一面あるいは二面以上にわたって、中央部に敲打痕のある凹みを有するものを敲石と

した。石材は、砂岩、半花崗岩、斑鰐岩等が用いられている。完形品は5点あり、表面中央に敲打痕のある凹みを有し、周縁部にも敲打痕が認められるもの(3, 4, 5)と、上下両面に敲打痕のある凹みを有するもの(6)に分類される。また、側縁に磨耗痕を有し、磨石としての機能も持っていたと考えられるもの(4, 6)もある。

#### d. 磨石(第14図7~9)

敲石にみられるような敲打痕のある凹みを礫面の中央に持たず、広い範囲に磨耗痕を有するものを磨石とした。石材は、敲石同様、砂岩、半花崗岩、斑鰐岩等が使用されている。完形品は3点あり、礫の表面に磨耗痕が広く認められ、さらに礫全体に磨耗痕を有するもの(7, 9)と、表面にのみ磨耗痕が認められるもの(8)に分類される。

#### e. 磐石錠(第14図10)

2点とも完形品で、石材は安山岩と粘板岩を用いている。いずれも、小形の扁平な円礫の両端に数回の打撃を加えて糸掛けを作出しているが、抉りが明瞭なもの(10)と、調整が浅く不明瞭なものがある。

#### f. 石錠(第15図1~25)

総点数259点中、完形品はわずか42点であり、他は破損品あるいは未製品で、形態分類可能な198点の内、凹基無基式を以下のように分類した。

A類 幅が狭く、側縁は直線かやや脚部がひらくもの。

81点を数え、本遺跡における石錠の主体をなす。比較的厚手のものが多いが、個体により形態差があり、抉りの深さはまちまちである。脚部末端が丸く整形されているもの(5, 6, 7, 18)と、そうではないもの(1, 2, 3, 4)に細分される。

B類 やや幅広で、側縁は直線か非常にゆるく湾曲するもの。

22点みられるが、A類との厳密な分離は困難である。抉りの深さは個体間の差が少なく、A類同様に脚部末端が丸く整形されているもの(8)と尖るもの(9)に細分され、さらに極端に短身で幅広のもの(10, 20)が存在する。

C類 やや幅広の二等辺三角形状を呈し、抉りが非常に浅いもの。

24点を数えるが、個体間の形態差が小さく、大きさもほぼ一定している。脚部末端が鋭く尖るもの(11, 12, 13, 14)が主体を占めるが、末端が丸くなるものも存在する。

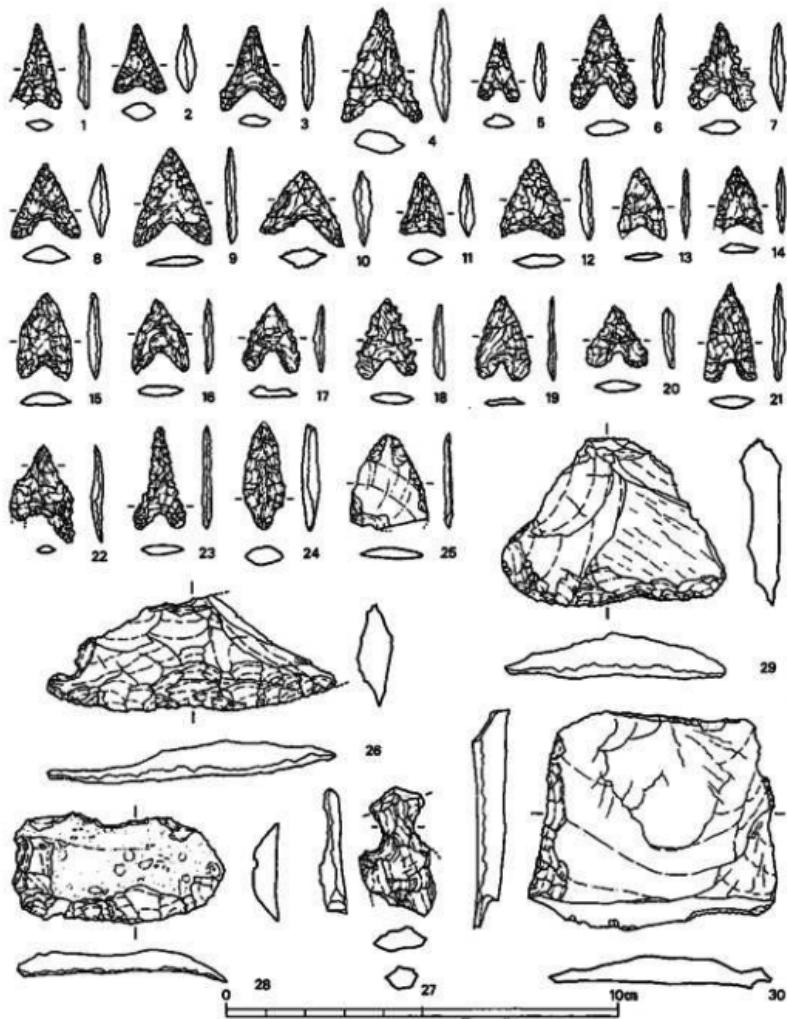
D類 やや幅広で、側縁が湾曲するもの。

24点を数え、形態、大きさとともに個体差が大きい。脚部末端が尖るもの(15, 16)と、丸く整形されているもの(17・19)に分けられる。

凹基無基式にはこの他に、特異な例として側縁上部にゆるい段をもつもの(21)、側縁下部にきつい段を持つもの(22)、極細で長身のもの(23)等がある。

凹基式以外には、凸基有基式(24)、平基式、円基式、剥片錠(25)等が認められる。

調整は一般に粗雑であるが、側縁に丁寧な調整加工を施し、鋸歯線状を呈するもの(6, 7, 18)もみられる。



第15図 縄文時代中期・後期石器実測図(2)

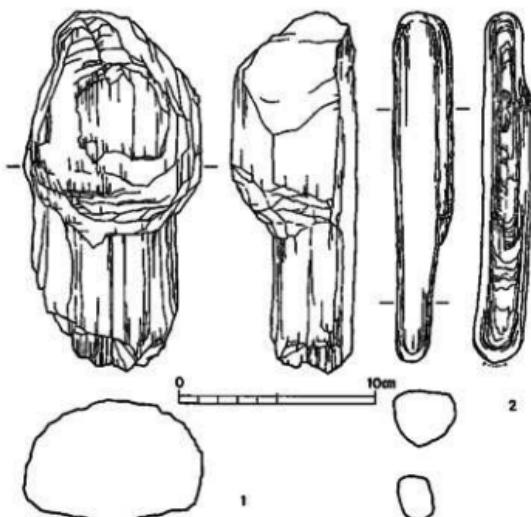
## g. 削器(第15図26~30)

完形品は6点認められ、素材剝片の主要剝離面を留めるものが大部分であるが、素材の用い方、刃部の加工方法によって分類が可能である。すなわち、縦長の剝片を横位に用い、その側縁に一方向からの調整加工によって刃部を作り出したもの(28)、横長の剝片の末端部に表裏両面からの調整加工によって刃部を作り出したもの(29)、ほぼ方形の剝片の側縁に一方向からの

調整加工によって刃部を作り出したもの(30)に分けられ、さらに調整が刃部だけでなく、素材剥片の全体に施される石匙(26, 27)も認められる。

#### h. 石製品(16図)

石製品は縄状片麻岩製の石棒(1)と、珪化木製の棒状の石製品(2)の2点であるが、石棒はかなり大型のもので、頭部の一部のみが出土しており、表面は簡単に研磨されている。棒状の石製品は表面が丁寧に研磨され、円棒状に整形されており、一端に敲打痕が認められる。



第16図 縄文時代中期・後期石製品実測図

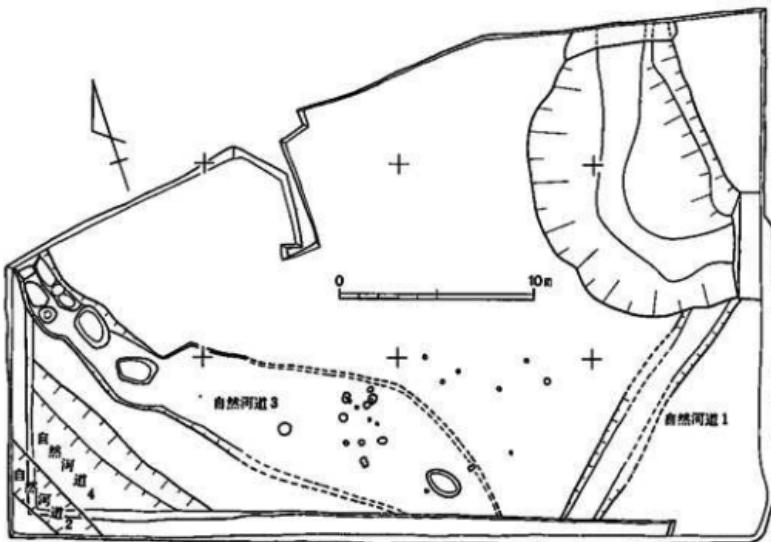
## IV. 縄文時代晩期の遺構と遺物

### 1. 遺構(第17図、図版第5)

晩期の包含層は下より暗灰白色砂質土層、黄褐色砂質土層、灰色砂質土層、灰黄色砂質土層の4層であり、前2層は出土遺物が極めて少なく、遺構も検出できなかった。これらの上の上の灰色砂質土層と灰黄色砂質土層については、灰色砂質土層を掘り上げた時点で、G 6・9において土壤・小ピット群を検出した。出土遺物は各々非常に少なく、それらの性格は不明であるが、この地区からサヌカイト片がかなりの量で出土していることから、石器製作に関連する遺構の可能性もある。

一方、階位の章で触れたように、縄文中・後期、晩期の包含層を切りかつ弥生後期包含層の下になる自然河道が4本検出された。各河道は縄文後期～弥生前期の遺物を若干含んでいることと層の切り合い等から、晩期のある時点で形成されたものとみられる。

なお、後述の弥生後期溝を完掘した時点で、溝外から溝内に、溝断面のゆるやかなカーブにそって堆積する晩期凸帯文土器を包含する土層を検出した。この時期のかぶり土を耕すと、縄文中・後期の包含層である茶灰色砂質土層となる。これは弥生後期溝と合致するが、これを晩期の人工的な溝と考えるよりは、一応、谷(?)状遺構として扱っておきたい。時期に関して



第17図 繩文時代晚期遺構図

は、茶灰色砂質土層の時期より新しく、晚期凸帯文土器の時期以前ということになろう。

## 2. 遺物

### 1) 土器(第18~22図、図版第12・13)

#### a. 暗灰白色砂質土層出土土器(第18図1)

図示した以外に細片が少々出土しているのみである。復原口径43.1cmの浅鉢で、内外面研磨の精製土器。肩部から口縁部にかけての屈曲からみて、滋賀里III式に相当するものと思われる。

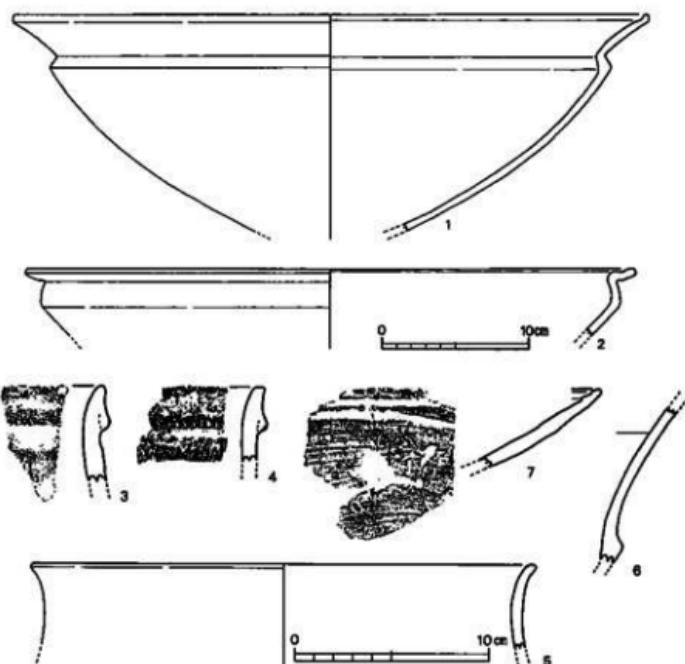
#### b. 黄褐色砂質土層出土土器(第18図2~7)

3・4は凸帯を口縁端よりかなり下に残らす深鉢で、5は口縁部がゆるく外反するもの。2は復原口径41cmで、口縁部が短く外反する浅鉢。6は頸部の長い、7は内面に2条の沈線を残らす浅鉢。これらは滋賀里III~IV式に相当するものと思われ、暗灰白色砂質土層のものより新しい傾向を示す。なお、この層には混入か一部後期の土器を含む。

#### c. 灰色砂質土層出土土器(第19・20図)

人工層位(約8cm)で2~4回に分けてとり上げたので、その人工層位(とり上げは上より「灰1」、「灰2」…の順)の下から順に述べることにする。この層出土の土器は船橋式に相当するものと思われる。

灰4出土土器 第19図1・2は深鉢の口縁部・胴部片で、凸帯にD字状刻みを施す。3は深鉢胴部片で、下半部はヘラケズリ、上半部はナデ。

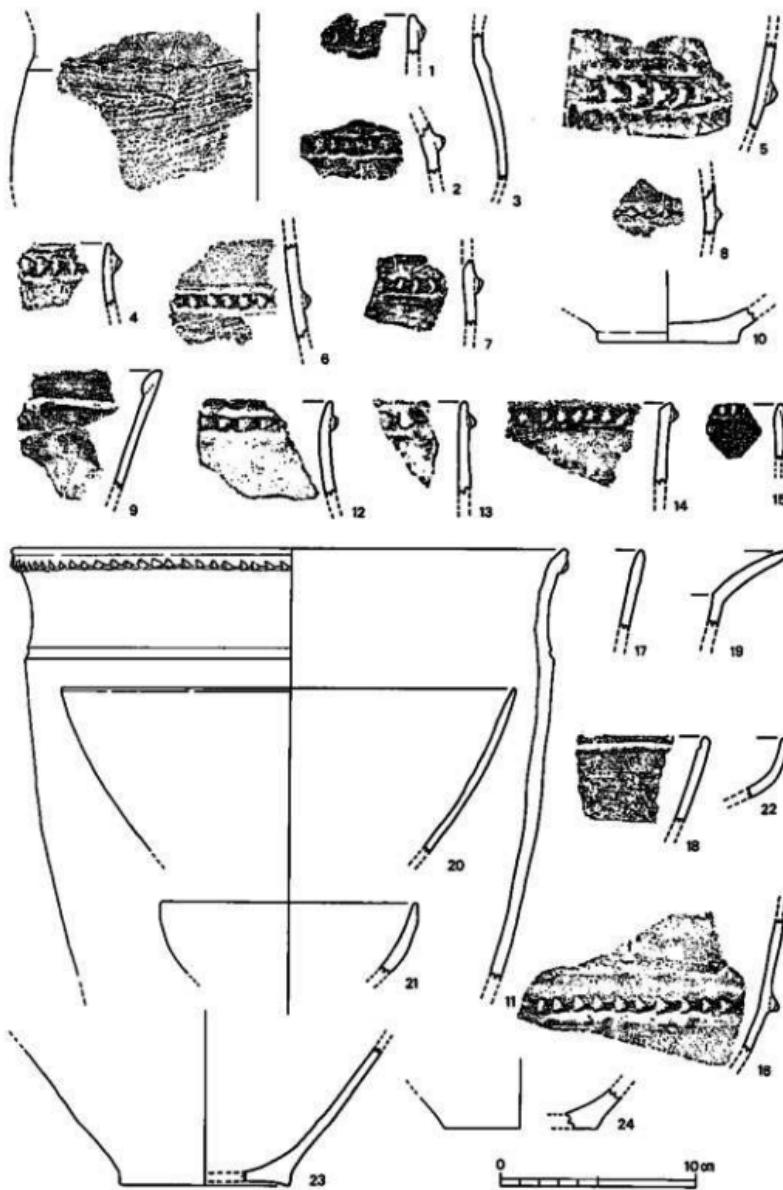


第18図 暗灰白色砂質土層・黄褐色砂質土層出土土器拓影実測図

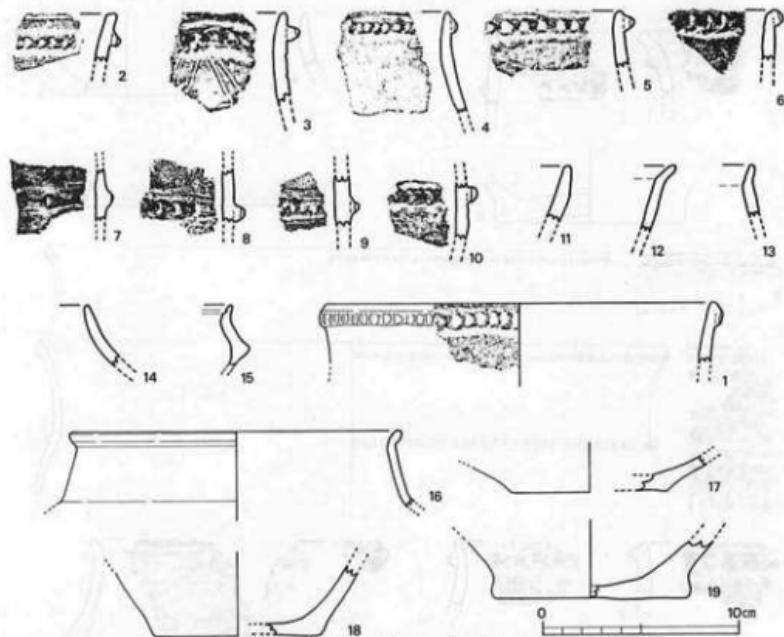
灰3出土土器 第19図4は深鉢口縁部。5～8は深鉢胴部で、5はかなり太目の凸帯に大きなD字状刻みを施す。7・8は凸帯の上に沈線が認められる。9は浅鉢と思われ、内外面研磨で、口縁部内面が丸く肥厚している。10は底部。

灰2出土土器 第19図11は20・23の浅鉢と一括で出土(図版第8下左)した深鉢で、復原口径28.3cm、かなり大きな小石粒を混える。胴部があまり張らず、口縁端よりやや下がって凸帯を1条廻らし、肩部には1条の凹線を廻らす。12・13は口縁端部よりやや下に凸帯が、14・15は口縁端直下に凸帯が付く深鉢で、このうち14は河内系である。16は深鉢胴部片で、凸帯の上下ともヘラケズリ。17・18は素縁の深鉢になると思われる。ただ、18は口縁部が立ちそうであったので深鉢としたが、内面に1条の沈線を廻らしているので浅鉢になる可能性もある。19は口頸部が大きく屈曲外反する浅鉢。20は復原口径23.1cmの浅鉢で、23の底部と同一個体と思われるが、接合する部分がなく、別々に図示した。21・22は小形の浅鉢になると思われる。24は内外面研磨で、精製土器の底部。

灰1出土土器 第20図1は復原口径19.8cmの深鉢。ここでも、深鉢は口縁端よりやや下がって凸帯を付するもの(2～5)と口縁端直下(1・6)のものがある。3には、凸帯の下に沈線による文様が認められる。7～10は深鉢胴部片。11～15は深鉢の口縁部片と思われる。16は復原



第19図 灰色砂質土層出土土器拓影 実測図(1)



第20図 灰色砂質土層出土土器拓影実測図(2)

口径16.5cmの壺で、黒色を呈し、内外面研磨、薄い器壁の精製土器である。17~19は底部片で、17は内外面研磨の精製土器。

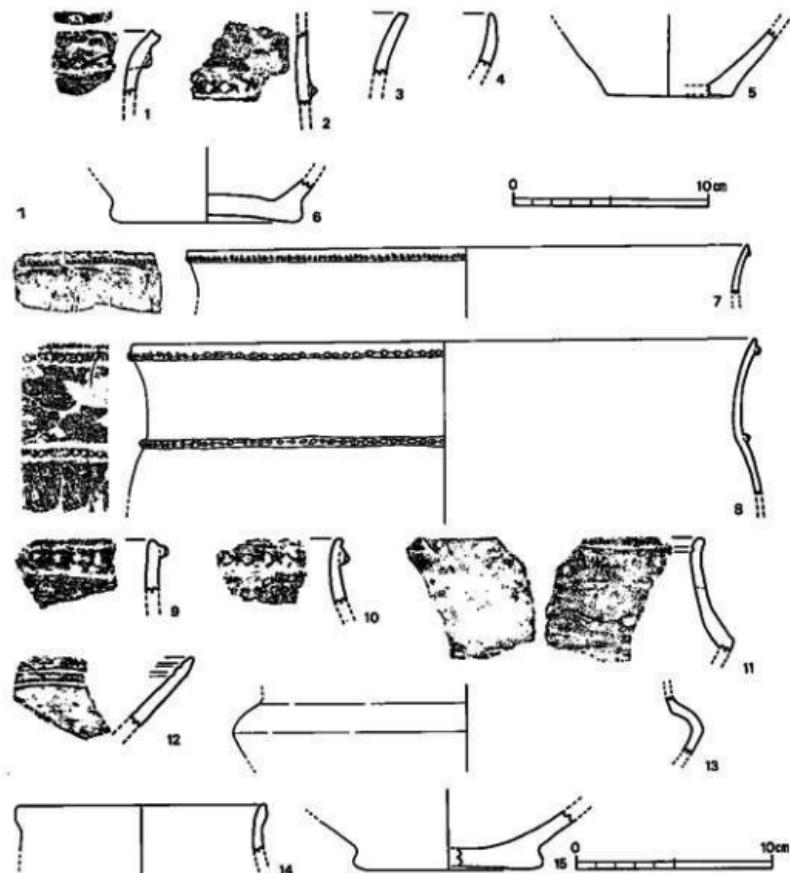
#### d. 灰黄色砂質土層出土土器(第21図)

この層も人工層位で2層に分けてとり上げたので、灰色砂質土層同様、下から述べていく。この層出土土器も船橋式に相当するものと思われる。

灰黄2出土土器 第21図1は口縁端よりやや下に凸帯を廻らし、口縁端部にも押えにより凹みを付した深鉢。7は復原口径47.6cmで、口縁端直下に凸帯を廻らす深鉢。8は灰黄1でとり上げた破片とも接合し、復原口径52.8cmで、かなり大きな砂粒を多く含む。口縁端よりやや下に凸帯を廻らし、肩部にも凸帯を廻らす。胸部は下から上へのヘラケズリ、両凸帯間はナデである。3は口縁端部が平坦な素縁の深鉢、4は浅鉢になると思われる。5は内外面研磨で、精製土器の底部、6は河内系である。

灰黄1出土土器 9・10は凸帯を付した深鉢。11は口縁部内面に1条の沈線を廻らした河内系の浅鉢。12は口縁部内面に2条の沈線を廻らした内外面研磨の黒色を呈する浅鉢。13は復原胴径24cmで、内外面研磨の浅鉢。14は、復原口径12.3cmの壺で、口縁部がやや肥厚する。15は、底面ヘラケズリの底部。

#### e. 自然河道出土土器(第22図)

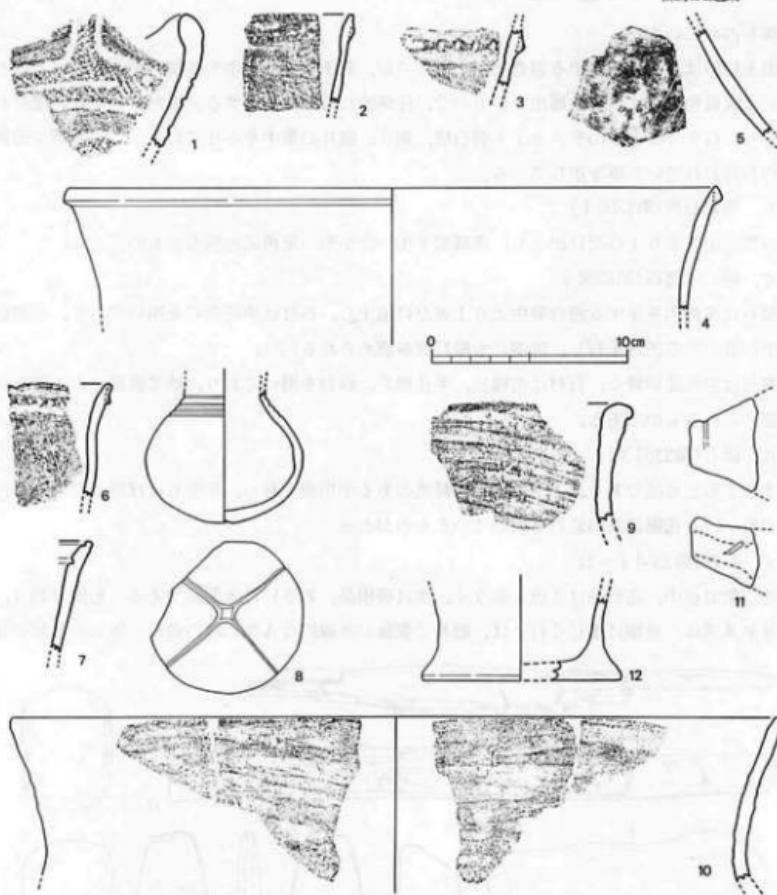


第21図 灰黄色砂質土層出土土器拓影実測図 (7, 8は縮尺1/5)

自然河道1 第22図1は後期中津式の波状口縁深鉢になると思われる。2～4は晩期の深鉢で、4は復原口径32.8cmの河内系土器。5は弥生前期の壺片と思われ、内外面ミガキで、外面に沈線による文様が認められる。

自然河道2 6は晩期の深鉢、7は内面に2条の沈線を廻らし、深鉢になると思われる。8は復原胴径8cmの小形の壺形土器で、淡褐色を呈し、精選された胎土。肩部に沈線を4条廻らし、最下の沈線から体部を4分割するように沈線を底部まで垂下させ、底部からみると、十字形の文様をなす。東日本的な要素を多分に有した土器と言えよう。

自然河道3 9・10は後期の粗製深鉢。11は注口土器の注口部片であるが、磨滅が著しく、文様は識別し難い。12は後期の底部と思われる。



第22図 自然河道出土土器拓影実測図

## 2) 石器・石製品(第23図、図版第13)

## a. 石器組成と出土状態

灰色、灰黄色および黄褐色を呈する包含層出土の石器・石製品は縄文時代晩期に属するものと考えられる。

製品の総数は50点を数え、その内訳は、磨製石斧1点、敲石1点、磨石3点、砥石2点、石鏃31点、石錐3点、楔形石器8点、用途不明の石製品1点となっている。他に、後期同様、磨耗痕のある平坦面を有する大形の花崗岩礫等が6点認められる。

石器の石材も後期と全く変化せず、打製石器はサスカイト、磨製石器は花崗岩、斑紋岩等が

主体を占めている。

出土状態は、灰色を呈する包含層出土のものが、若干G 8に集中する傾向をみせるが、ほとんどは灰黄色を呈する包含層出土のもので、圧倒的にG 9に集中する。また、いずれの層においても、G 9では多量のサヌカイト製石核、剝片、破片の集中をみており、この場所で石器製作が行われていた事を示している。

b. 磨製石斧(第23図 1)

自然河道 3より 1点だけ出土し、班禰岩を用いた小形の定角式の両刃のものである。

c. 敲石・磨石(第23図 2)

敲石は黄褐色を呈する包含層中より 1点だけ出土し、石材は半花崗岩を用いており、2側縁に敲打痕のある凹みを有し、両端にも敲打痕が認められる(2)。

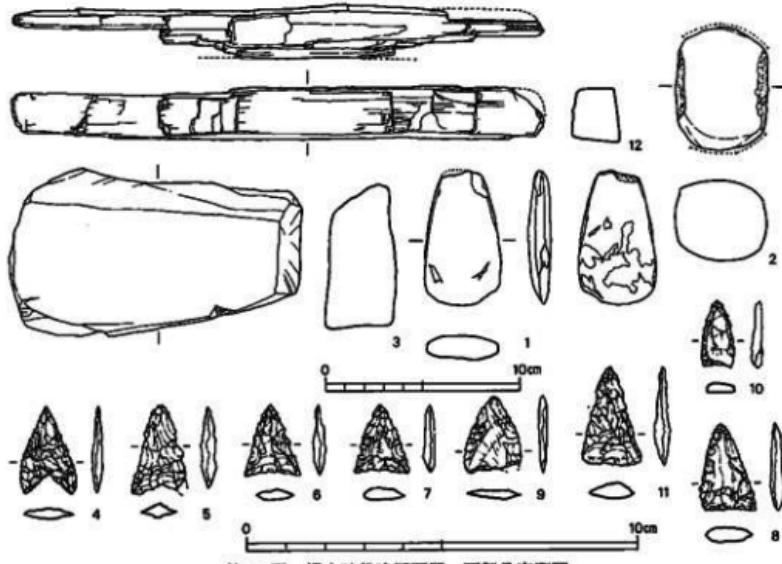
磨石は完形品が無く、石材は班禰岩、半花崗岩、砂岩を用いており、統て表面にのみ磨耗痕が認められるものである。

d. 磨石(第23図 3)

2点とも完形品であり、上下両面に磨耗痕のある平坦面を有し、形態もほぼ同じであるが、砂岩製(3)と花崗岩系の岩石を用いているものがある。

e. 石錐(第23図 4~11)

総点数31点中、完形品は3点しかなく、他は破損品、あるいは未製品である。形態分類は、凹基無茎式は、後期に準じて行けば、細身で側縁が直線的なA類(5)の他に、幅広のB類が存



第23図 縄文時代晩期石器、石製品実測図

在する。晩期に目立つ形態は、後期のC類の快りがさらに浅くなり、平基式に近くなるもの(6, 7, 8)である。また、剥片鏡もこれに近い形態を示す(9・10)。

凹基無茎式にはこの他に、側縁下部が湾曲するもの(4)や、側縁下部に段を持つものがある。凹基式以外には、平基式(11)、円基式、尖基式等が若干認められる。

調整は一般に粗雑であるが、各類型内では個体差が少なく、画一化する傾向をみせる。

#### f. 石製品(第23図12)

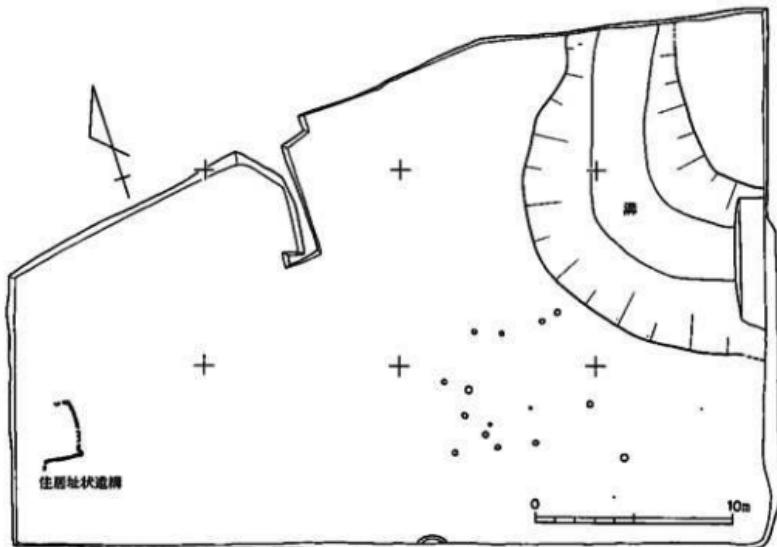
珪化木製の角棒状を呈する1点のみが出土している。部分的に欠損しているため、正確な形は不明であり、使用的痕跡も認められないが、側面はやや研磨されている。

## V. 弥生時代後期の遺構と遺物

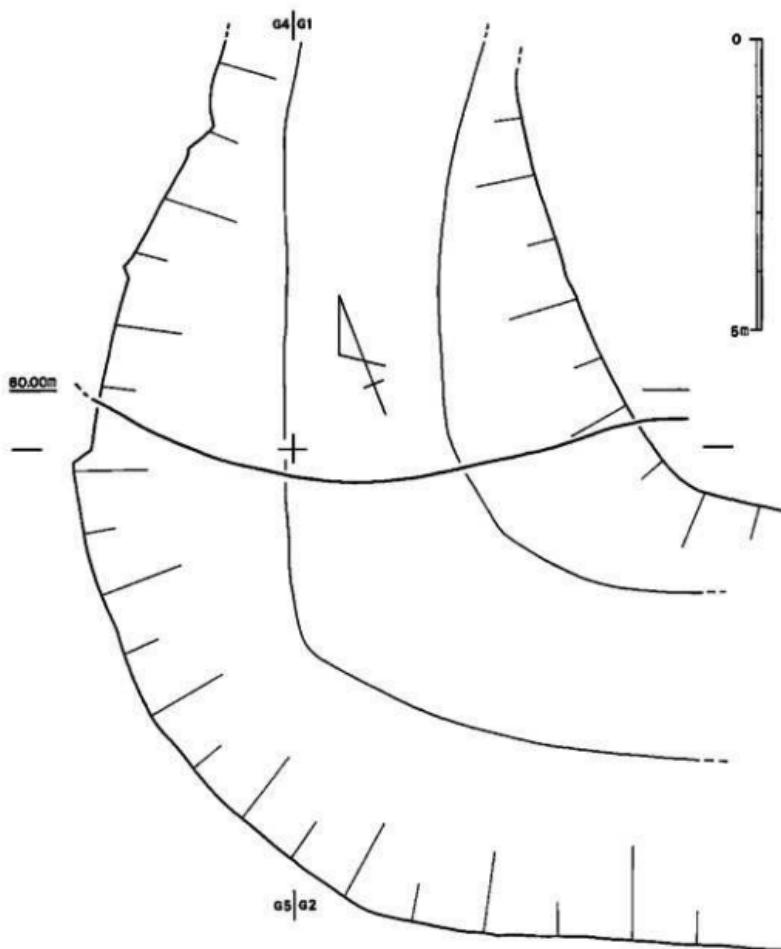
### 1. 遺構(第24~27図、図版第6・7)

主なものとして、溝・住居址状遺構が検出された。この他に、直径15~40cmのピットが16, G 6で土壌の約半分が調査区南壁にかかって検出された。これらのピット・土壌の出土遺物は少なく、また一直線状に並ぶものもあるが、それらの性格は不明である。

溝(第25図)は調査区の北東にかかり、北から南へのび、ほぼ直角に折れて東へのびていく。現状で幅7.2~9.8m、深さ約1.5mのゆるやかなカーブを描く断面を呈する。溝内は6層に分け



第24図 弥生時代後期遺構図



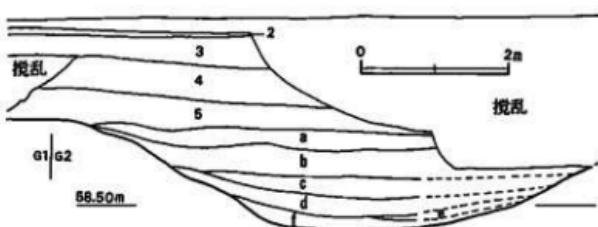
第25図 溝実測図

られ、上より淡茶灰色砂質土層、暗茶褐色砂質土層、明茶褐色砂質土層、暗黒墨色砂質土層、灰黑色砂質土層、暗灰黑色砂質土層が弓状に堆積している(第26図)。なお、平面的には分層が難しく、この断面にかかるブロック状に入ってくる砂等をかむ部分もある。この溝は前述の谷(?)状造構と称したものと同じ位置にあり、人工的に掘削されたものか、あるいは谷状(?)造構を利用したものかそれに堆積したもののかは断定し難い。

住居址状造構(第27図)は、中央を水道管、西を建物基礎で破壊されていたが、南北幅約2.8m

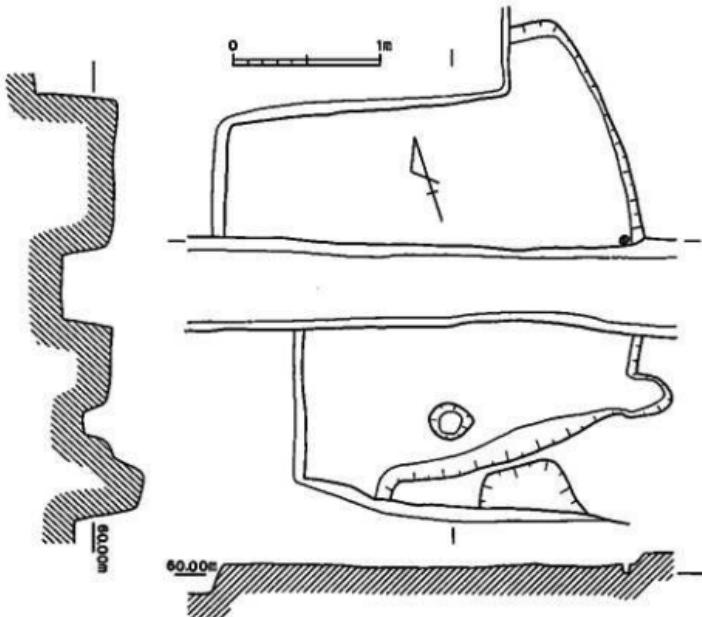
を測り、大小2つのビットが確認できた。大きなビットの上には土器(第32図)がかたまっていた。一边が住居址にしては狭すぎること、柱穴になると思われるビットが1つしか確認できなかつたことから、住居址とは断定し難い面があり、住居址状造構としておく。

床面は明白ではな



第26図 溝層位断面図(調査区東壁)

2. 明黄色砂質土層, 3. 明灰色砂質土層, 4. 暗黄褐色砂質土層, 5. 暗紫色砂質土層(以上は、第5・6図の層名と一致する), a. 淡茶灰色砂質土層, b. 暗茶褐色砂質土層, c. 明茶褐色砂質土層, d. 暗黒墨色砂質土層, e. 灰黑色砂質土層, f. 暗灰黑色砂質土層(以上、溝内)



第27図 住居址状造構実測図

ったが、晩期の包含層を掘り込んで作られていた。

## 2. 遺物

### 1) 土器(第28~33図、図版第14)

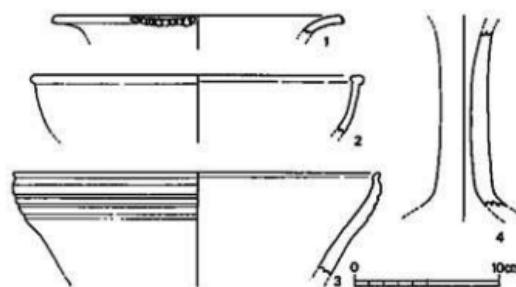
コンテナ約60箱分の大量の土器片が出土しているが、細片が多く完形ないしはそれに近く復原しうるものは極めて少ない。これだけの量のうち全形を復原しうるものは図版第14の4点のみであった。包含層(暗紫色砂質土層)・溝内も含めて、人工層位(約8~10cm、上から暗紫1~2……と称す)で13層ほどに分けてとり上げた。レベルからいくと、上層(暗紫1~6)が包含層、下層(暗紫7以下)が溝内ということになるが、包含層と溝内の土層の色調が明瞭に識別できず、人工層位もあり、相互に若干の混入はありえよう。土器の量で言えば、包含層は溝内に比べて相対的に少なく、溝内では人工層位での暗紫8~10の間に集中し、溝内出土土器が全体のほぼ%を占めている。

#### a. 溝内出土土器(第28・29図)

第28図の土器は暗紫10でまとめて出土している古い要素を有する土器を掲げた。1は口縁端に刻目を入れた要になるものと思われる。2は口縁端部が丸く肥厚する鉢、3は復原口径24.8cm、口縁部に凹線を廻らし、口縁端部近くで括れて、外反する鉢。4は高杯脚片で、脚部が長い。

第29図はその他の溝内出土土器の図示しうるものである。

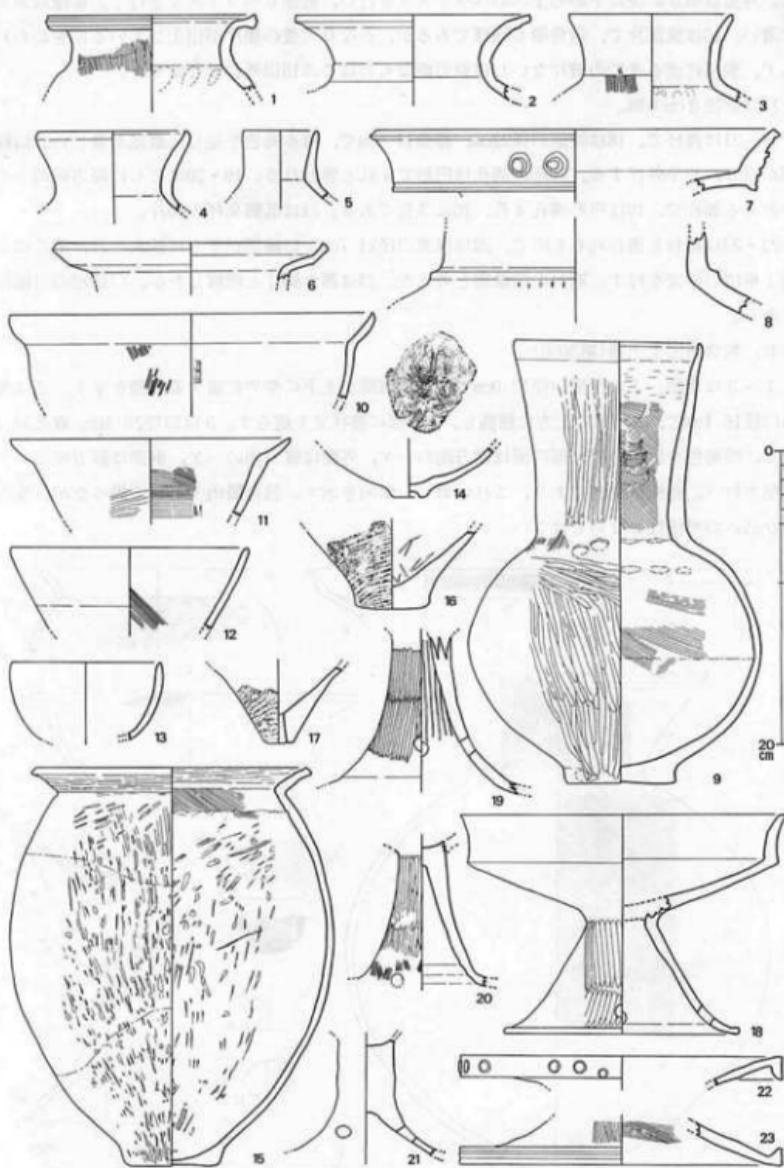
1~9は壺類。1・2は口縁部が外反するもので、3はやや外反度が弱い。4は口頸部が外反するも端部が内側に入り込む。5は口径5.1cmの直口に近い口頸部を呈す。6は壺になると思われるが、受口状の口縁部を呈す。7は復原口径27cmの二重口縁の壺で、内外面ともミガキであり、口縁部に浮文が付く。8は頸肩部片で、頸部と肩部との境に凸帯を廻らし、その下に刺突文を施す。9は数少ない復原可能なものである。長頸壺で、口径12.5cm、器高30.2cm、褐色を呈し、内面ハケ調整、外面は頸部と肩部の境に一部ハケメは残るもの、全面ヘラミガキで、口頸部は縦方向のミガキ、体部も基本的には縦方向のミガキであるが、肩部近くは斜のミガキ。なお、この長頸壺は19・20の高杯脚片と一緒に出土している(図版第8下右)。



第28図 溝内出土土器実測図(1)

10~14は鉢類で、10・11は口縁部が外へ屈曲するもの、12は外方へ開くもの、13は粗製の小形鉢である。14は鉢の底部と思われ、底径は2.5cmである。

15・16は壺で、15は口径18.3cm、器高27cmで、口縁部内外面はヨコナデ、内面の口縁部下に一部ハケメが認められる。それ以下は下から上へのヘラケズリ



第29図 溝内出土土器実測図(2)

で、外面は叩きの後に下から上へのヘラケズリを行い、底部もヘラケズリを行う。器壁は非常に薄い。16は底部片で、包含層も同様であるが、かなり大量の甕片が出土しているにもかかわらず、胴部に至るまでの破片ないし復原可能なものはこの15以外にはなかった。

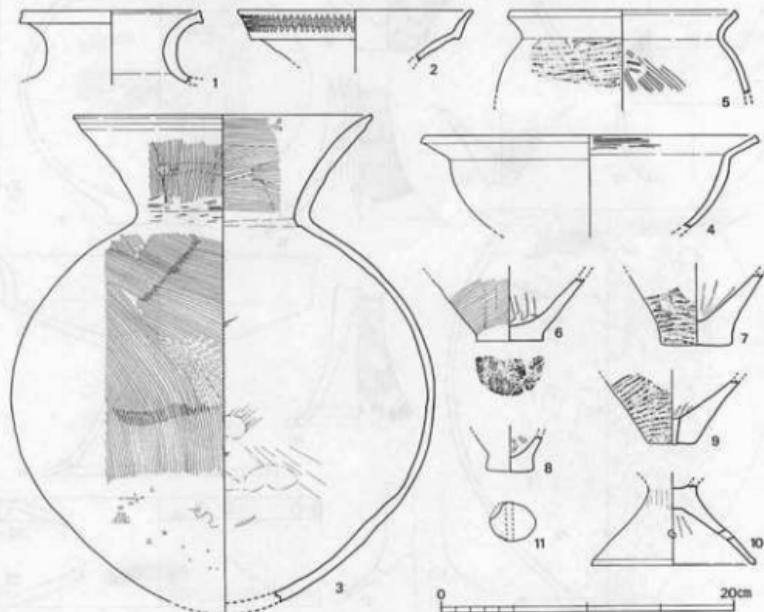
17は底径 2 cm の甕。

18～21は高杯で、18は復原口径 22 cm、器高 14.9 cm で、暗赤褐色を呈し、磨滅が著しい。口縁部が立ち、やや外反する。脚部の透孔は円形で 4 孔と思われる。19・20はともに縦方向のミガキのある脚片で、19は円形透孔 4 孔、20は 3 孔である。21は低脚高杯の脚片。

22・23は器台と思われるもので、22は復原口径 21.7 cm、口縁部が下方に拡大され、そこに 3 個 1 単位の浮文を付す。器台の口縁部と考えた。23は器台脚片と理解したが、口縁部の可能性もある。

#### b. 包含層出土土器(第30図)

1～3 は壺類。1 は復原口径 12.0 cm で、口縁端部が上下にやや拡張する形態を示す。2 は復原口径 16.1 cm で、口縁部で上方に屈曲し、口縁部に波状文を廻らす。3 は口径 20.4 cm、器高 34.1 cm で、淡褐色を呈す。口縁部内面は横方向のハケ、外面は縦方向のハケ、胴部は斜方向のハケ調整を行う。底部は丸底であり、これは新しい傾向を示す。包含層出土として扱ったが、後の掘り込みの可能性もないではない。



第 30 図 包含層出土土器実測図

4は、復原口径22.5cmの口縁部が外へ屈曲する鉢である。

5～8は壺で、5は復原口径15.3cmで、胴部の張りは弱く、外面の叩きは太いが、口縁端部はややつまみ上げ状になる。6～7は底部片で、6の底部には木葉痕が認められる。8は、底径3.3cmの小形のもの。底部片は溝内と同じく多数出土しているが、胴部に至るまでの破片ないしは復原可能なものはなかった。

9は壺で、底部にも叩きが施され、直径1・3cmの穴があく。

10は高杯脚片で、脚高5cm、円孔を4方にあける。

11は土錘で、直径約3cm、半分が欠失している。

### c. 有文土器片(第31図)

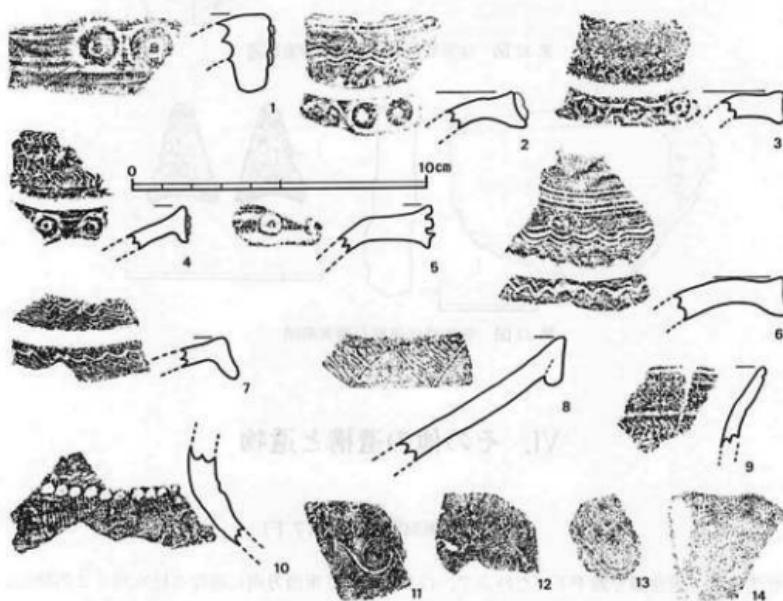
1～4は円形浮文を口縁端部に付するものである。1は河内系の土器。2は内面に波状文を廻らす。3は内面にX字の文様を廻らす。4は内面にX字と＜字の文様を廻らす。

5は竹管様の施文具で口縁端部に刺突する。6・7は口縁端部と内面に波状文を廻らす。

8は器台口縁部片と思われるが、端部に鋸歯文を施す。

9はX字と＜字の文様を口縁部に廻らす。10は長頸壺の頸肩部片と思われ、頸部と肩部との境に刺突文を廻らす。

11～13は同じ渦巻文のモチーフの上にX字の文様を入れるもので、このモチーフは小林行雄博士が報告されたものである。14は竹管様のもので刺突。



第31図 有文土器片拓影実測図

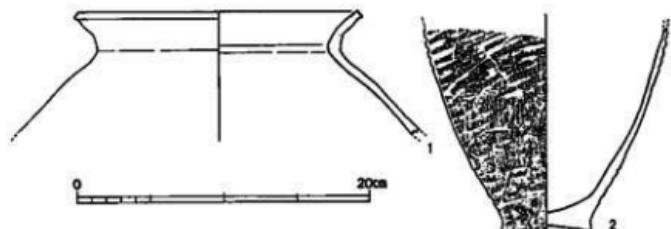
## d. 住居址状遺構出土土器(第32図)

1は復原口径18.9cmの壺で、磨滅が甚しいが、口縁部外面にヨコナデ、内面にハケメが認められる。2は壺と思われ、やや橢円形に近い胴部で、図は短径をとった復原である。外面は太い叩きで、縱方向ハケで一部消すが、難な消し方である。

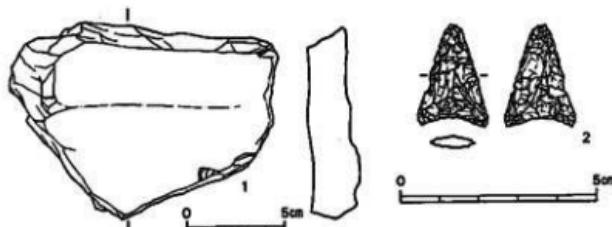
## 2) 石器(第33図)

石器は砥石と石鎌が各1点ずつ出土したのみである。

- a. 砥石(第33図1) 砂岩製で、凹みが2ヶ所みられ、かなり使用された痕を窺せる。
- b. 石鎌(第33図2) 凹基式に属し、長さ2.6cm、基部幅1.8cmの二等辺三角形を呈す。サヌカイト製。



第32図 住居址状遺構出土土器実測図

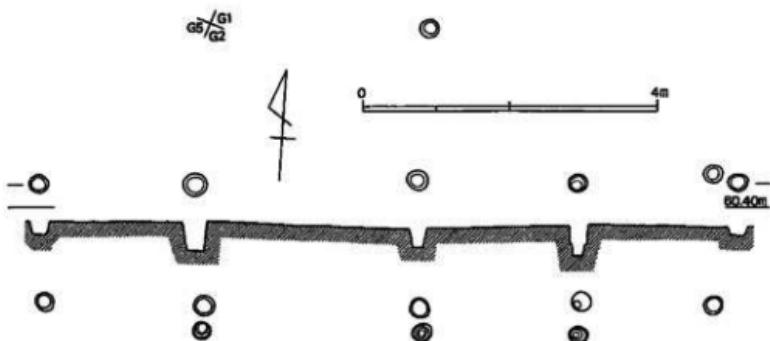


第33図 弥生時代後期石器実測図

## VI. その他の遺構と遺物

## 1. 遺構(第34図、図版第7下)

弥生後期の包含層を若干下げた時点で、G 2において東西方向に連なる柱穴列を2列検出した。各柱穴は直経25~30cmで、間隔は東より約1.8m, 2.2m, 3m, 2.2m, 南北間は約1.6~1.8



第34図 柱穴列実測図

mである。このうち4個には隣接して同じ大きさの柱穴がある。また、G1の西方で同じような柱穴が1個だけ確認されたが、これら2列に並行して東西に柱穴列が存在していた可能性もある。出土遺物は少なく、弥生土器に混じり須恵器片が出土した柱穴もあるが、年代の決め手になるものがない。しかし、確実な柱穴出土品ではないが、弥生後期包含層をさらに下げている時点で、G1西方の柱穴近傍より第35図の須恵器片が出土した。この柱穴列の時期を必ずしも確定する資料ではないが、前述したように面的に把握できなかつた柱穴のものとも考えられる。もしそうであれば、この柱穴列の年代を示すことになるので参考資料として挙げておく。口径15.5cm、器高5.3cmで、暗灰色を呈し、全面ヨコナデ。底部は糸切り。ほぼ11世紀中頃のものと思われる。この柱穴列に伴うものとすれば、柱穴列の時期はその頃ということになろう。

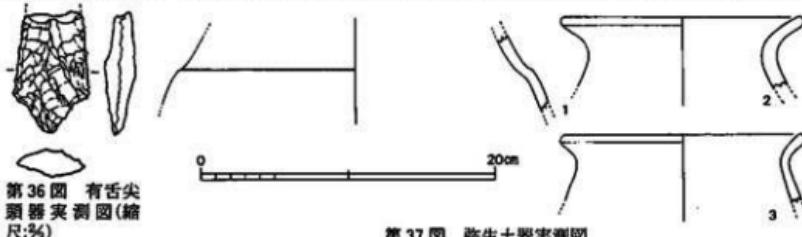


第35図 柱穴列付近出土須恵器実測図

## 2. 遺物

**有舌尖頭器(第36図)** G9・12の茶灰色砂質土層から出土。現存長3.1cm、基部幅1.9cm。サヌカイト製で、風化している。

**弥生土器(第37図)** 1はG3暗紫色砂質土層で取り上げたが、自然河道1に伴う可能性が大きい。壺肩部片で、淡褐色を呈し、砂粒を多く含む。肩部で段になり、ここでの復原直徑は約



第36図 有舌尖頭器実測図(縮尺:3%)

第37図 弥生土器実測図

24cm。外面はヘラミガキであるが、内面は剥離が著しい。I様式古段階に相当するものと思われる。2・3は表採品で、3は内外面ヘラミガキ。両者とも中期の壺になるものと思われる。

## VII. 放射性炭素年代測定

### 1. はしがき

放射性炭素<sup>14</sup>Cによる年代決定は次式によって行われる。

$$t = 8033(\text{年}) \times \log_e \frac{N_0}{N}$$

$t$ は古代遺物が現在までに経過した年数、8033年は<sup>14</sup>Cの平均寿命(<sup>14</sup>C半減期を5568年とするとき)、eは自然対数の底(2.718282……という無理数)、 $N_0$ は現代の炭素1グラム中の<sup>14</sup>C原子の数、Nは同じく古代遺物炭素1グラム中の<sup>14</sup>C原子の数である。 $N_0$ は一定であるからNだけを求めれば、古代遺跡・遺物の経過年数が判る。

こうして得られた<sup>14</sup>C年代が真の年代と一致するかどうかは、年数のはっきりしている試料を測定してみれば直ちに判明する。液体シンチレーション法では、近世の歴史的文献の存在する試料について常にぴたりと一致する。

現在では年輪の確実に判っている古い大木について、今から7000年前頃の年代まで<sup>14</sup>C年代と年輪年代(これは絶対年代と考えてよい)との比較対照がなされ、<sup>14</sup>C年代と年輪年代との間によい一致が知られているが、近世においては最大200年、縄文早期・前期において最大700年位のずれがあることが判っている。したがって、厳密に絶対年代を知りたいときには<sup>14</sup>C年代から年輪年代へ読み換えたらよい。これにより、今から7000年前までは<sup>14</sup>C年代はほぼ完全に絶対年代を知る手段となし得るのである。それより古いものについては、<sup>14</sup>C年代は絶対年代の第一近似とみることができる。

### 2. 測定方法について

液体シンチレーション測定法は絶対測定であって、試料中の<sup>14</sup>C原子の数を求めることができるものである。これに対し従来の気体計数法は比較測定であって、標準試料と未知試料を同一条件のもとに計数してその比から年代を求めるものである。測定器の条件や、ガスの純度などが常に一定であれば全く問題はないが、一定であることを証明することは難しい。特にガスの純度を純粹にすることが大切であるから、高純度の得やすい方法が採用されるべきであろう。世界的にみて、気体計数法に代って液体シンチレーション法が増加しつつあるが、気体法で最も多く残っているのは炭酸ガスを用いるところであるのも当然である。炭酸ガスは単純安定なガスであるから純粹にしやすい。それに対しアセチレンのような炭化水素系は不純物が多くでやすいので、<sup>14</sup>C年代測定値に信頼性が乏しいのはやむを得ない。

液体シンチレーション法では、試料を純粹にするのに困難さはないが、少しくらいの不純物

が混入しても絶対測定であるから問題にならない。

試料の炭素から筆者らはメチルアルコールを作り、<sup>14</sup>Cのベータ線を測っている。<sup>14</sup>C原子の数はベータ線の数に比例する。ただし、100%確実に計測しなければ意味がない。ベータ線の計数は、<sup>14</sup>C原子核から放出されたすべてのベータ線を数えとるわけではなく、70%とか80%の割合でしか数えない。しかし、測定器の数える割合を確実に求めることができればベータ線を100%捕えたことと同じ意味になる。

ベータ線の捕捉率を計数効率という。液体シンチレーション法では、ベータ線計数と計数効率の両者を求めることができるので<sup>14</sup>Cの絶対崩壊率が判り、これを崩壊定数で割ると<sup>14</sup>C原子数が得られるのである。

シンチレーションとは一種の発光現象で、液体中のベータ線による発光を計測して放射性原子の絶対数を求めるのが液体シンチレーション計測法である。

液体シンチレーション法では、試料をガスで測るよりも大量に使用できる。したがって、ベータ線の計数も大きくなり、相対的に誤差が小さくなる。また、測れる年代もずっと古いところまで延長できる。筆者のところでは最大6万年位までは可能である。

測定誤差は、1標準偏差(1シグマ)だけが用いられる。この信頼度は実験的諸誤差が無視できる場合に限り68%である。この2倍の値を取ると95%の信頼度になり、3シグマで99.7%の信頼度となる。液体シンチレーション法ではこの範囲を越える実験誤差を生ずることは極めて稀である。その場合とは試料が極めて微量のときである。藤原A遺跡の試料の量は極めて少なかったので、それについて後に触れる。

### 3. 測定結果

K S U-720(藤原A, №1) 1650±180 B. P.

木炭, G 6 暗紫色砂質土層2(包含層), 弥生後期, 炭素量0.655g, 測定時間2000分。

K S U-721(同, №2) 1670±70 B. P.

木炭, G 4 暗紫色砂質土層3(包含層), 弥生後期, 2.58g, 1500分。

K S U-722(同, №3) 4120±1000 B. P.

木炭, G 6 灰色砂質土層1, 繩文晚期, 0.15g, 2000分。

K S U-723(同, №4) 3220±100 B. P.

木炭, G 5 茶灰色砂質土層1, 繩文中・後期, 1.51g, 2000分。

K S U-724(同, №5) >45000 B. P.

木炭, G 4 茶灰色砂質土層2, 繩文中・後期, 4.10g, 2000分。

K S U-725(同, №6) 3820±200 B. P.

木炭, 土壤5下, 繩文後期, 0.721g, 2000分。

K S U-726(同, №7) 4390±350 B. P.

木炭, 住居址, 繩文中期末, 0.611g, 1000分。

#### 4. 測定結果の考察

K S U-720, 721の弥生後期の試料の測定結果についてはやや新しい数値になっている。試料が極く僅かしかないことも考慮されねばならないが、最大誤差の3倍まで取るとすれば矛盾はない値である。

K S U-722については、通常は不可能な量であるが、誤差範囲では十分縄文晚期といえる。

K S U-723は縄文中期末・後期前葉として妥当な値である。

K S U-724は奇妙な試料で、これのみかなりの量で得られているにも拘らずたいへん古い結果で、一体どのような試料であるのか再検討すべきである。

K S U-725, 726も大変微量であるにも拘らずかなりの確実さで縄文中期末から後期頃の遺構であることを示している。

#### VIII. まとめ

様原遺跡は、冒頭でも述べたように、小林行雄博士が戦前に報告されていた周知の遺跡であった。今回の発掘は、本遺跡に対する最初の本格的調査となるものである。小林博士が報告された遺物は弥生後期が主であって、その他に縄文晚期などが含まれていたが、今回の調査によって、縄文中・後期、縄文晚期、弥生後期の包含層を有する複合遺跡であることを確認した。

遺構に関しては、特に縄文中期末～後期前葉の遺構を検出したことが大きな成果と言えよう。住居址は遺存状態が悪く、明確にとらえにくい面はあったが、その出土遺物と共に良好な資料となりうるし、他の遺構も土壤4のように疊が詰め込まれた状態で検出されるなど、本遺跡における縄文中・後期の遺構は、周辺地域でこの時期の遺構の検出例がなかっただけに、遺物と共に先駆的な資料となりえよう。

縄文晚期では、G 9を中心としてサヌカイト製石核・剥片・破片が集中的に出土しており、このことはそこで石器製作が行われていたことを示唆するものであろう。同時に、調査区域内では住居址等は検出されなかったが、この時期の生活遺構が近辺にあるであろうこともまた示唆するものとも言えよう。一方、晚期から弥生前期にかけての自然河道を4本検出し、これらの間には若干の時期差があるにしても、この時期に集中していることは、当時の自然環境を考える上で、一つの参考となろう。

弥生後期に関しては、溝が検出されたが、これを人為的な掘削と断定するには難しい面がある。縄文中・後期の包含層である茶灰色砂質土層が弥生後期溝と同位置で凹み状になっており、そこに縄文晚期の包含層がその凹みに沿って堆積していたので、縄文後期後半～晚期にかけての谷(?)状遺構としておいた。この晚期の包含層の上に弥生後期の埋土が堆積しているわけで、自然堆積とするのが妥当とも思える。しかし、土器にはローリングを受けているものはあるものの、多量の土器がこの溝内から出土していて、このことは周辺に集落があった可能性を示唆

するものと思われ、その意味では人工掘削、谷(?)状造構の利用の可能性もあり、この溝が環濠の可能性も否定できない。もし、この溝が環濠とすれば本調査区域外の東北に集落の存在の可能性も想定されるわけであるが、現段階では確認できず、今後の調査によって検証されるものと考える。

以上の他に、時期判定に確定的な要素がやや欠けるものの、平安時代後期と考えても良いと思われる東西に並ぶ柱穴列を検出した。これが壇列になるのか建物になるのかはにわかに断じ難く、また弥生後期溝の南西に分布するピット群のうちには、弥生後期ではなく、この時期のピットになる可能性のあるものもあるかもしれない。小林博士の報告中にも、平安末～鎌倉前半頃と思われる羽蓋が図示されており、今後の調査次第では平安～鎌倉期の造構の発見の可能性も否定しきれない。

遺物に関しては、造構同様、縄文中期末～後期前葉の土器と300点近くの石鏃をはじめとした石器・石製品を得たことは成果であった。石器では、有茎鐵が1点出土しており、従来この有茎鐵は後期段階では西限が東海地方までとなっているので、この資料は、混入品でなければ、その西限をぐっと西へ拡げる資料となろう。縄文中期末・後期前葉の土器は、茶灰色砂質土層ないし造構からかなりの量が出土した。特に、住居址、土壤からはそれぞれがほぼ単純に出土しており、一括遺物として非常に重要な資料と考える。また、包含層出土のものも、分層はできなかつたが、この時期以外のものをほとんど含まないことから、非常に一括性の高い資料である。また、ほぼこれと同時期のものと考えられる京都大学構内遺跡の資料と照らしあわせてみても、中期末から後期にかけての時期のいくつかの問題点を考える上で、また、この時期の西日本の各地域性を明らかにする上でも一つの情報を与えてくれるものと考える。ただ、今回、時間的制約もあって、充分な整理・検討を行うことができず、ただ資料を表示するにとどまってしまった。今後、改めて資料を検討することにしたい。

晩期に関しては、凸帯文土器の包含層が2層確認され、IVでは層位と人工層位ごとに資料を呈示してみた。両層の差異は歴然としたものではなく、長原式に近いものもあるものの、船橋式が主体を占めていて、小林博士が報告された斎棺と思われる土器とほぼ同時期ということになろう。晩期に関しては充分な検討を加える時間がなく、今後改めて検討してみたい。

弥生後期に関しては、大量の土器片が出土しているにもかかわらず、復原可能なものが極めて少なく、決して良好な資料とは言えないであろう。溝内出土土器に関しては、第29図9の長頸壺を目安にすると後期中葉頃に位置するものであろう。そして、この時期を中心にして、一部第28図のように古い要素をもつても溝内から出土している。包含層出土土器は溝内より新しい傾向を示すようであるが、溝内・包含層とも大きく後期を中心とする年代とらえておきたい。なお、伯母野山遺跡群では飯傭壺が出土しているが、本遺跡では破片からも抽出できず、土錐が1点のみ出土しているだけで、伯母野山遺跡群より海岸に近い本遺跡でのこの傾向は若干の注意を要するかもしれない。

以上、造構・遺物とともに十分な検討を加えることができなかつたが、本遺跡においては良好

な状態で包含層の基本層序がとらえられ、かつ遺構も検出されている。したがって、本遺跡調査にやや遅れて行われた篠原B遺跡の報告書と共に、本報告書が篠原遺跡の調査・研究の今後の一助となれば幸である。

## 註

- 1)小林行雄『播磨国神戸市篠原遺跡に就いて』(『史前学雑誌』第1巻第4号掲載。東京、昭和4年)、同『播磨国神戸市篠原遺跡に就いて(二)』(『史前学雑誌』第1巻第5号掲載。東京、昭和4年)。
- 2)若林泰・齊藤英二『伯母野山弥生遺跡』(『神戸市文化財調査報告』6、神戸、昭和38年)。
- 3)石野博信・阿久津久・浅間俊夫『荒神山遺跡発掘調査概要』(神戸、昭和45年)。
- 4)兵庫県教育委員会『桜ヶ丘銅鐸銅戈』(『兵庫県文化財調査報告』第1回。神戸、昭和44年)。
- 5)神戸市教育委員会『滝ノ奥経塚調査概要』(『古代文化』第34巻第11号掲載。京都、昭和57年)。なお、周辺遺跡の概要については、同市教育委の森田稔氏に御教示頂いた。
- 6)この項の記述に関しては下記の文献を参考に

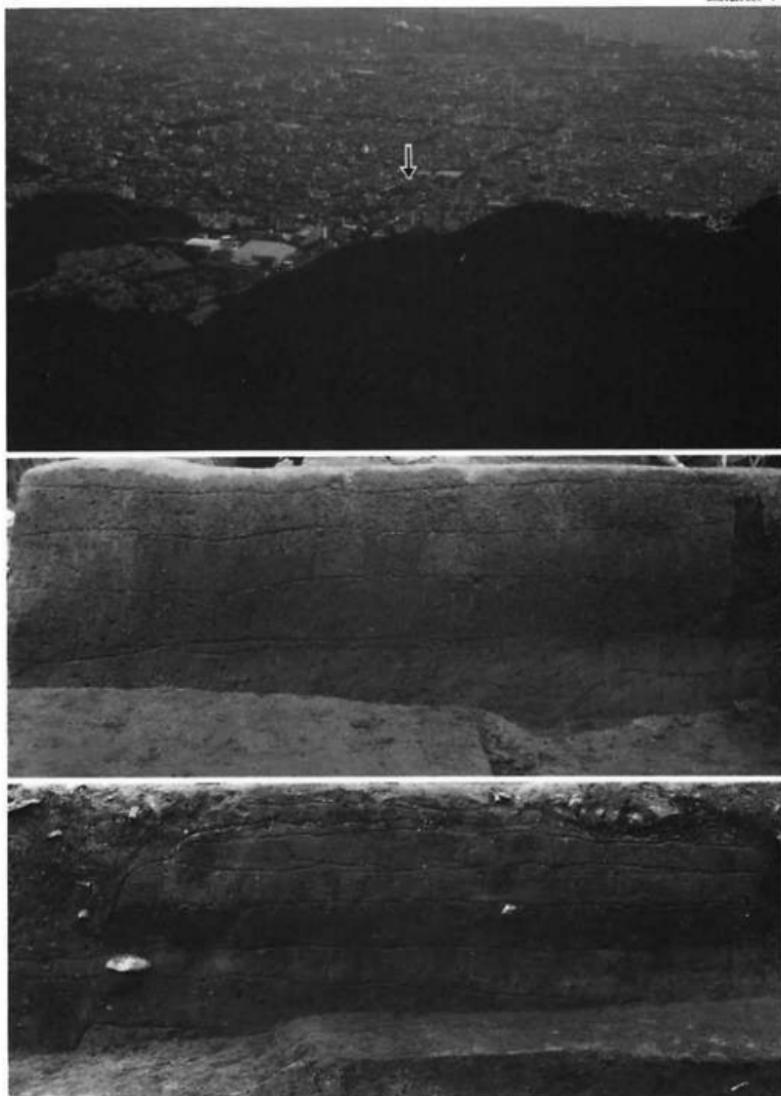
した。

中村徹也『京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』(京都、昭和49年)。中村徹也他『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要(I)』(京都、昭和49年)。中村徹也『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要(II)』(京都、昭和53年)。泉拓良『西日本縄文土器再考』(『縄文文化の研究』第4巻所収。東京、昭和56年)。

なお、本遺跡の縄文土器の整理に当っては、京都大学助手の泉拓良氏(現奈良大学講師)に大変お世話になった。心より感謝したい。

7)鈴木道之助『石鐵』(『縄文文化の研究』第7巻所収。東京、昭和58年)。

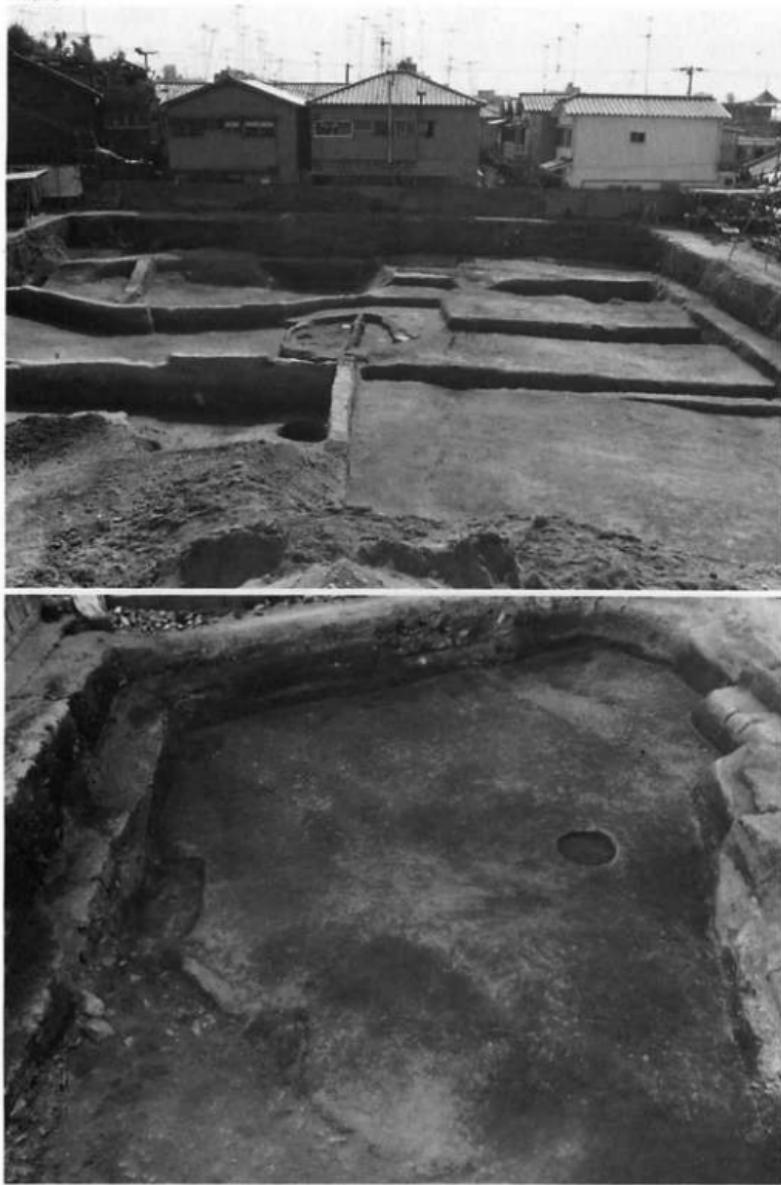
# 図 版



遺跡遠景・層位

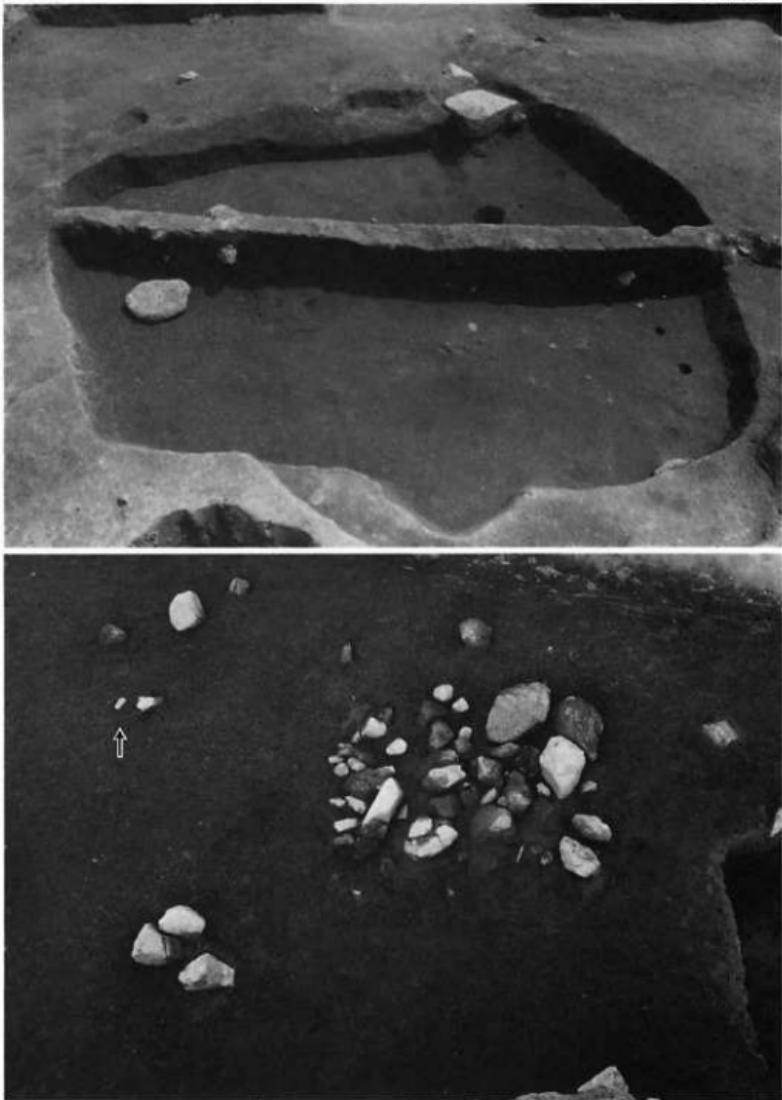
上：麻耶山山頂より眺む(矢印が篠原A遺跡) 中：第3トレンチ西壁(上部)断面  
下：調査区南壁断面部分

図版第2



調査終了状況

上：東側地区（西より）、下：西側地区（南より）



縄文時代中期・後期遺構(1)

上：住居址(北より)，下：砾溜(西より。矢印が磨製石斧)

図版第4



縄文時代中期・後期遺構(2)  
上：土壙4(南より)、下：土壙5(北より)



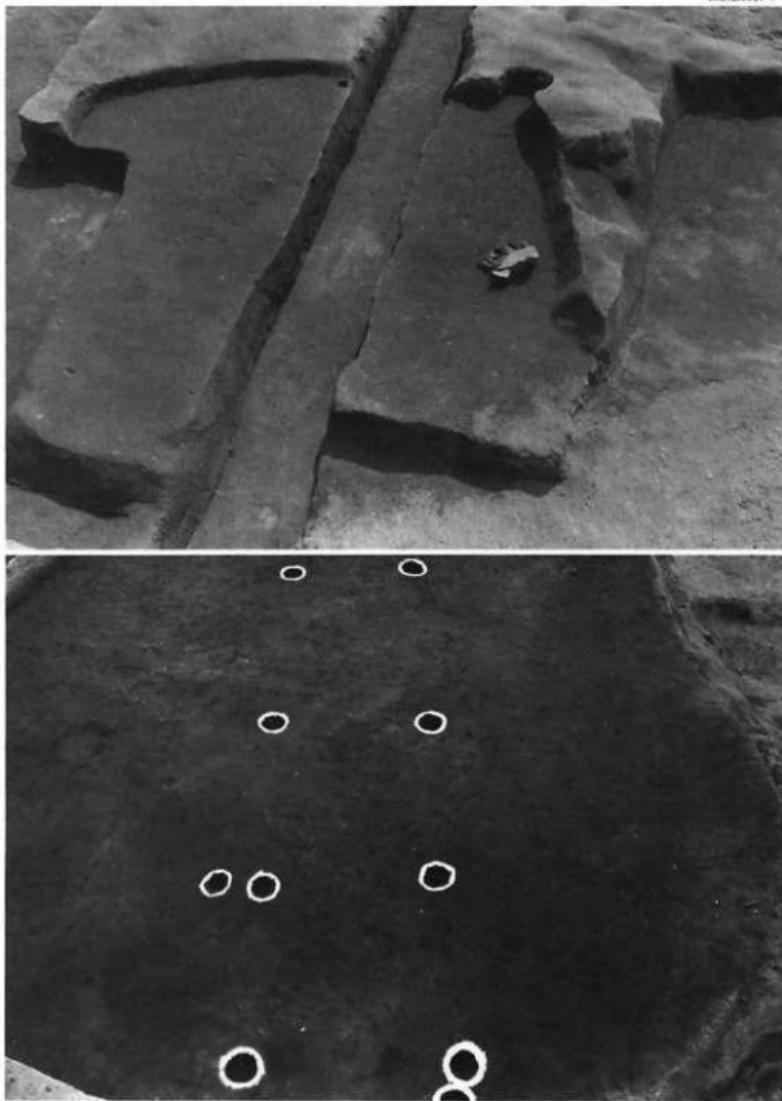
縄文時代晩期遺構

上：自然河道3・4(南より)，下：谷(?)状遺構(南より)

図版第 6



弥生時代後期遺構(1)  
上：溝(南より), 下：同(西より)

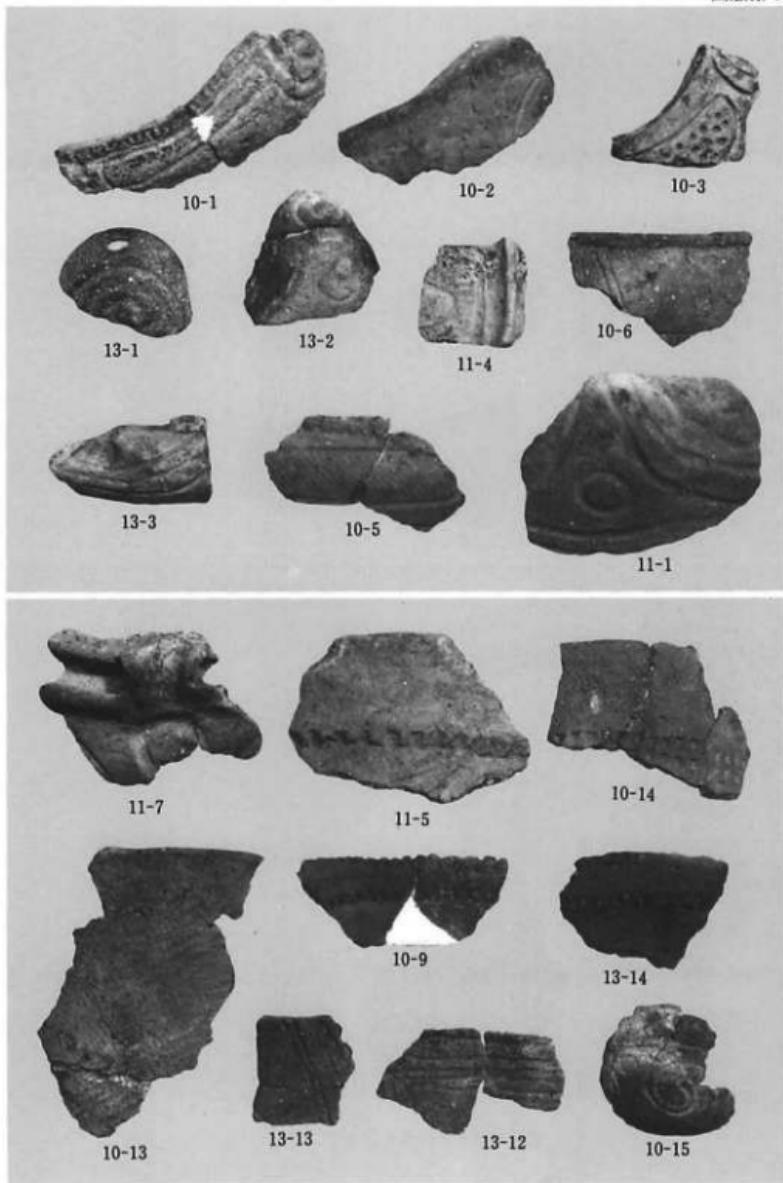


弥生時代後期遺構(2)・その他の遺構  
上：住居址状遺構(西より)、下：柱穴列(東より)

圖版第 8

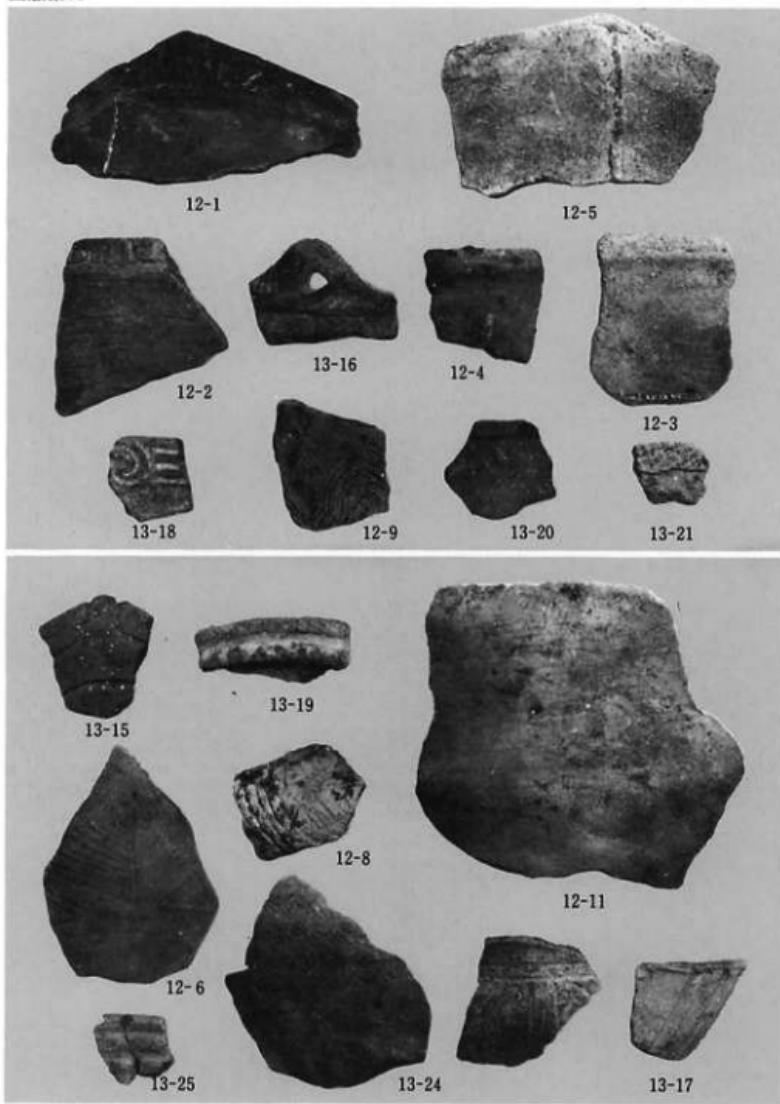


上左：商文時代中期・後期磨製石斧，上右：同石棒，下左：同石棒，下右：穿生時代晚期土器（溝內）  
遺物出土狀況

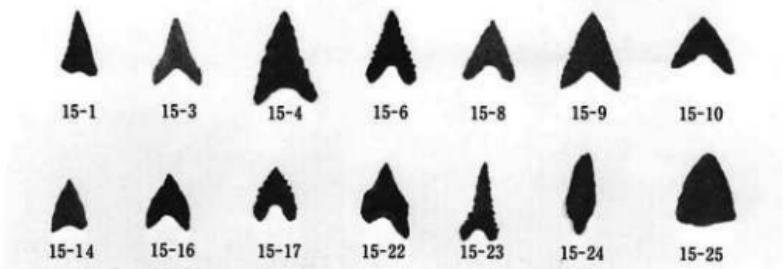
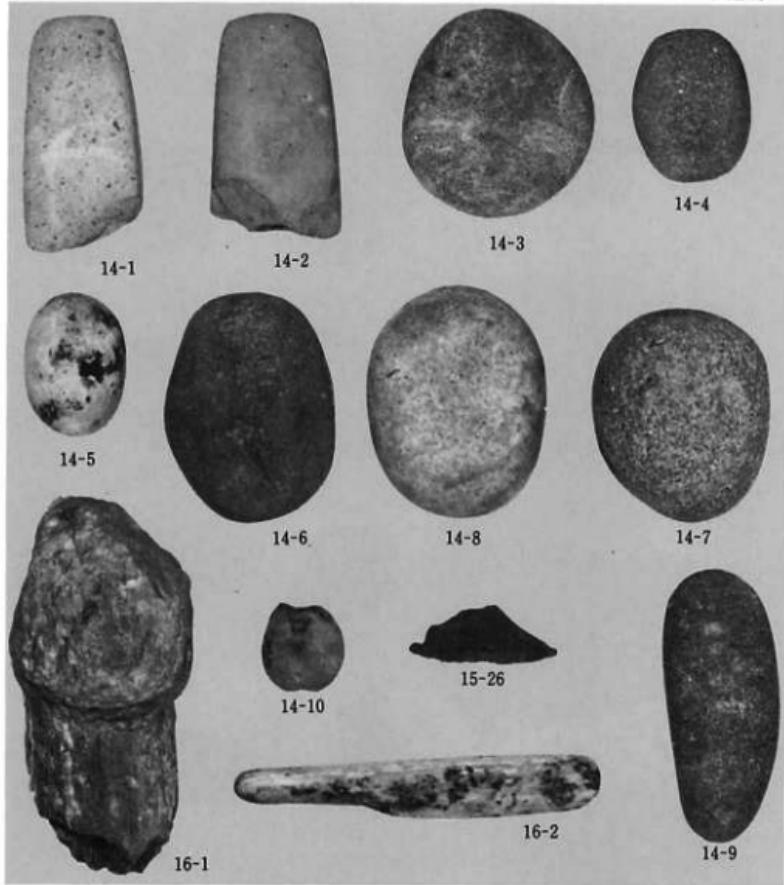


縄文時代中期末土器(縮尺: 約1/9)

図版第10

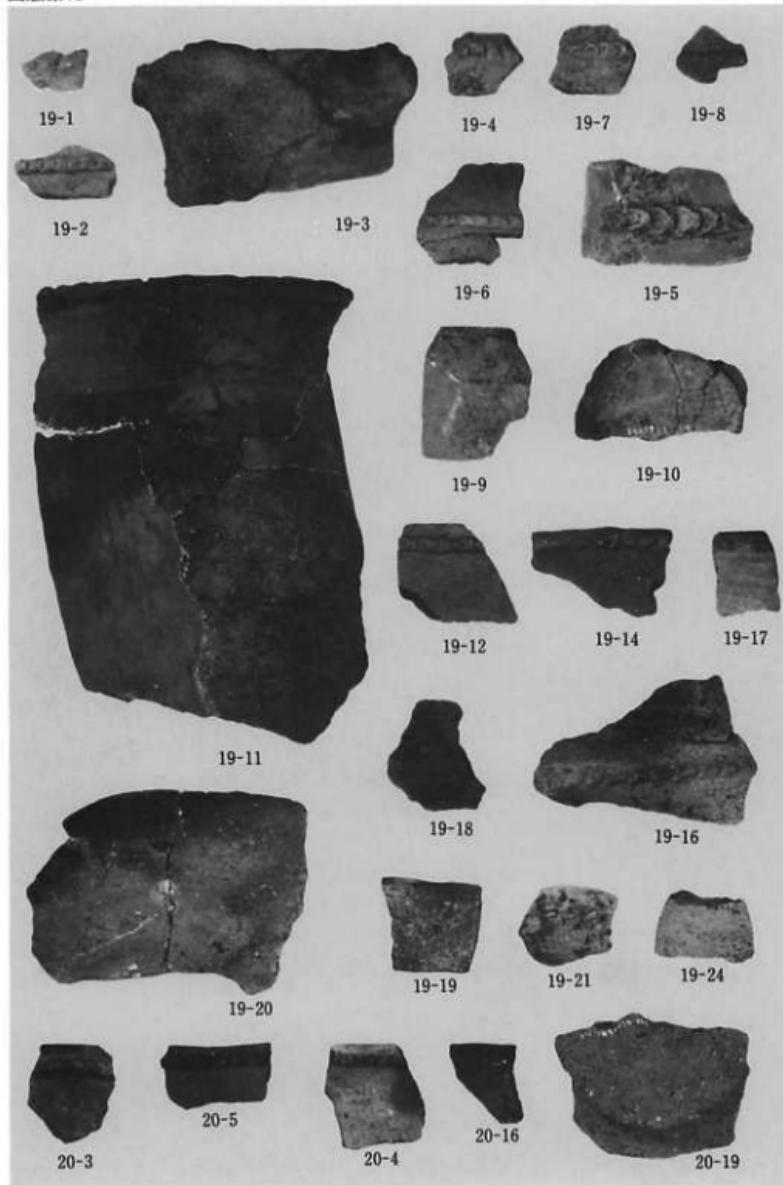


縄文時代後期前葉土器(縮尺:約3%)

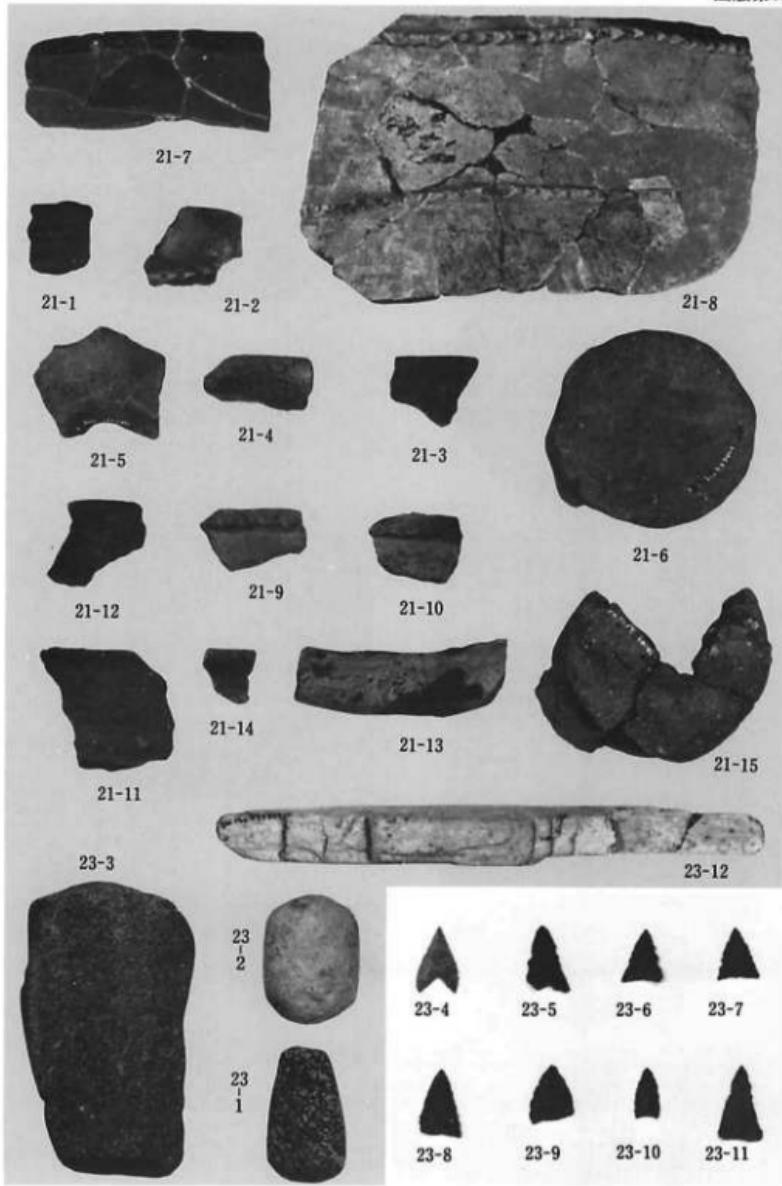


縄文時代中期・後期石器、石製品(縮尺: 約1/3, 石錐は約1/2)

図版第12

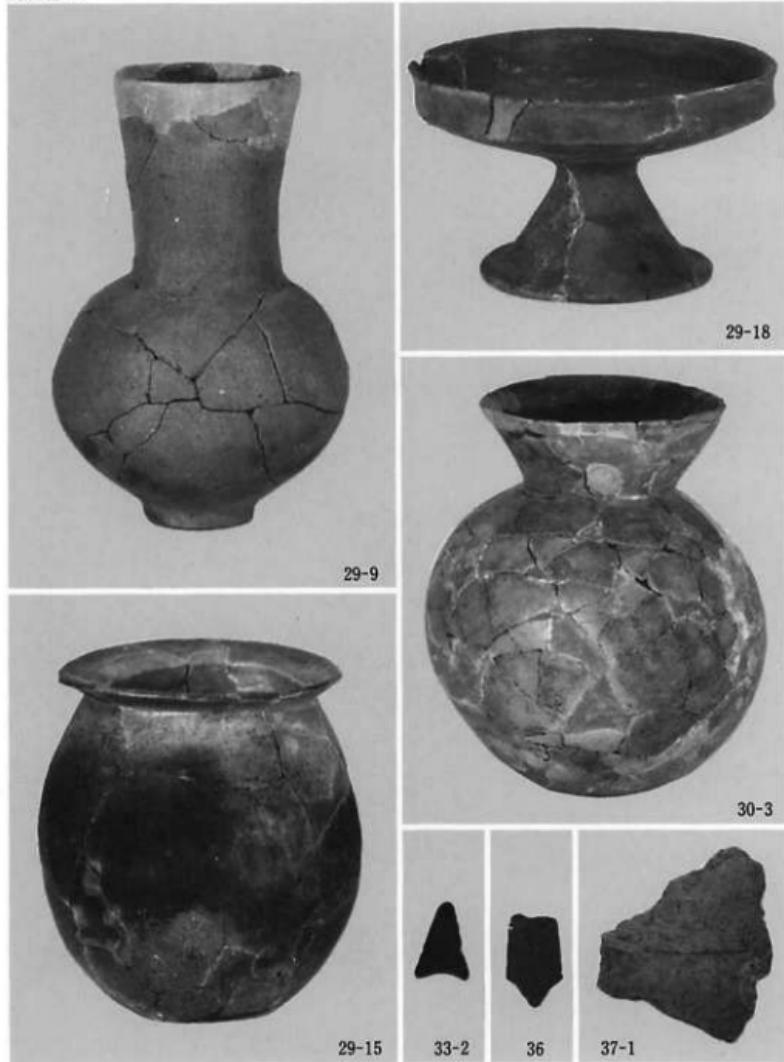


縄文時代晩期遺物(1) (縮尺:約3%)



縄文時代晩期遺物 (2) (縮尺: 約3倍, 石器は約3倍)

図版第14



弥生時代後期遺物・その他の遺物(縮尺: 29-9・15・18は約 $\frac{1}{4}$ , 30-3は約 $\frac{1}{6}$ , その他は約 $\frac{1}{2}$ )

神戸市灘区

篠原A遺跡

発行日 昭和59年3月31日

編集 平安博物館考古学第三研究室 下條信行  
定森秀夫

発行 財團法人 古代學協会

〒604 京都府中京区三条高倉  
祇園京都 8-850番  
TEL. 075(222) 0888

印刷 東洋紙業株式会社  
〒556 大阪市浪速区芦原1丁目3番  
TEL. 06(567) 2111

